

# 日本における「スペイン風・南欧風」建築への偏愛について

河村 英和

On the Predilection for 'Spanish and Southern European-Style' Architecture in Japan

Ewa KAWAMURA

要旨： 戦前の日本では、米国経由のスパニッシュ様式建築がファッショナブルな建築様式と捉えられ、1920年代以降、白壁とオレンジ色の洋瓦の個人住宅、ホテルなどの公共建築でこの様式を採用するものが増加した。戦後は、飲食店でもスパニッシュ様式が流行し、1970年代にはマンションでも好まれ、気候・地形的に地中海と親和性が高い地域だけでなく、南国のイメージと結びつきにくい内陸部にも南欧風意匠の建物が広がった。

1980～90年代は、バブル景気によって海外旅行がより身近になり、本物の南欧建築に接する機会が増え、オレンジ瓦と白壁のスペイン風建築がさらに流行する。1992年は、バルセロナ・オリンピックとセビリア万博の開催もあり、スペイン風でもとくにアンダルシア風建築への偏向が強まり、気候・地形的に地中海と親和性が高いところを中心に、アンダルシア風をイメージしたリゾート開発やまちづくり（伊王島、賢島、沖縄、宇和島、淡路島、南房総、宝塚、横浜本牧など）が行われた。

バブル崩壊後は、外国をテーマにしたテーマパークは廃れてしまったものの、スペイン風・南欧風の町並みを再現した商業施設（アウトレット、ショッピングモール、ホテル、結婚式場）を建設する流行は続き、近年はSNSで写真映える関心から撮影スポットとなり、映画やドラマのロケ地としても注目されている。コロナ禍中の渡航制限や解除後も円安インフレで旅費が高騰し海外旅行がしづらくなると、国内にいながら外国気分になれる場所として、海外の建物や町並みを模した商業施設の人気は再燃している向きもあるが、バブル期に興隆したスペイン・南欧風の建物は、そろそろ過去の遺産の仲間入りをする準備段階に来ている。

キーワード： 南欧、スペイン、ポルトガル、南フランス、プロヴァンス、スパニッシュ様式、ホテル、テーマパーク、アウトレット、ショッピングモール

## 1. はじめに

オレンジや茶色の瓦と白壁（あるいはパステル色の壁）を特徴とする南欧風（スペイン、ポルトガル、イタリア、南フランス、ギリシャ）の建物は、装飾過多でもなく、瓦を用いる日本古来の民家建築から応用させ易い。そのためわが国の洋風建築の変遷史上、最も長期にわたり好まれ、かつ特段に事例が多いのは、スペイン風建築である。これは一括りにスパニッシュ建築と称していても、日本独自にシンプル化させた軽度にスペイン風のものから、装飾ディテールをしっかりと踏襲するスパニッシュ様式（プエブロ様式、ミッション様式、コロニアル様式とも呼ばれる）まで幅広い。いずれにしても1920年代以降から日本で流布していったスパニッシュ建築は、19世紀末から1920年代にかけアメリカで流行していたスパニッシュ様式建築の模倣であり、直接スペインから影響を受けたスペイン風建築は戦後以降で、とくに増加してゆくのはバブル期になってからである。

イタリア風あるいはイタリアをモチーフにした建物も戦前からの事例はあるが、非常に少ないうえ、あっても英米のイタリアネート建築やパラディアンスタイルを踏襲したものがほとんどだ。直接イタリアの建築からの影響や模倣は、バブル期以降のポストモダン建築や、テーマパークやショッピングモールや2010年代以降の結婚式場施設に多い<sup>(1)</sup>。またイタリアの場合は、特定の町（ヴェネツィア、ポルトフィーノ、フィレンツェ、アルベロベッロなど）や、

あるいは地方(エミリア=ローマニヤ、トスカーナ、ウンブリア)といった土地土地によってデザインが細分化され、それぞれ特徴が異なるため、「イタリア風」の建物が、一般的な日本人にとっての「南欧風」建築の典型イメージと必ずしも一致するとは限らない。イタリア建築からインスパイアされたり、模倣される建物の日本における流行は、わが国の「南欧・地中海趣味」を考える上で見逃せない現象だが、デザイン的な観点から「南欧風」と端的に呼ぶには違和感が残る場合もあるため、本論では日本におけるイタリア風建築については割愛し、別途機会を設けて独立したテーマとして論じたい。

また、ギリシャも南欧に含まれるものの、日本で建物に対して「南欧風」と表現される場合は、オレンジ瓦や外壁は白か暖色パステルカラーのものをイメージしがちなため、スペイン、ポルトガル、イタリア、南仏の建物のイメージが強い。じつはギリシャにもそのような建物がある地域もあるが、おそらく外国人がギリシャの建物としてイメージとして真っ先に思い描くのは、瓦のない白亜の建物と建具のブルーである。そのためギリシャは南欧諸国ではあっても、トルコからの影響もあり、その建物に対しては「南欧風」と呼ぶよりも「地中海風」という表現のほうが日本人にとってはしっくりくるので、本論では対象としないこととする。

本稿では、ごく普通の日本人が即座にイメージするようなオレンジ瓦と白や淡いパステル色の壁のある「南欧風」の建物の流行現象に焦点を絞り、日本にできたスパニッシュ・スペイン風の建物を中心に、その流行の変遷史を概観し、いかに日本人がスペイン風建築を偏愛してきたかを検証してゆきたい。

## 2. 長きにわたるスペイン風建築への偏愛

### 2-1. 戦前のスパニッシュ建築の流布

日本で最初のスパニッシュ様式の紹介は、1916年刊の書籍『住宅建築』のなかで、北米で普及していた「南部コロニアル式」について、米イリノイ大学への留学経験ある建築家、滋賀重列<sup>しげつら</sup>(1866-1936)が担当した箇所だ(滋賀, 1916, 125)<sup>(2)</sup>。現存する日本初のスパニッシュ様式建築の実作は、1919年築の群馬県桐生市にある桐生倶楽部会館で、南欧・地中海性との親和性のある気候の海浜地でもなく、このような内陸地にできたのは、スパニッシュ様式は流行の最先端を行く建築で、上流階級にふさわしいと考えられていた証でもある。欧米の住宅建築に精通した西村伊作(1884-1963)は、自著『楽しき住家』(1919年)のなかで、スパニッシュでも「コロニアル・ミッション様式」を紹介し(西村, 1919, 132-133)、さらに後年の著作『明星の家』(1923年)では「西班牙風の家」という節を設け、挿絵で取り上げたスペイン風住宅の説明として、現地の様式よりも簡素化させたスペイン風こそが、日本の民家にも合わせやすいことを、以下のように述べている。

「今回ここに掲げた家はスパニッシュに近いものです。しかし、スパニッシュ・ミッションと云ふよりは、西班牙民家風と云ふ方がよいでせう。民家の事ですから、世界共通の点が多く、日本の家の手法をどこに交せても少しも調和を欠くような惧が無いから、此の家を作るにも西班牙の家はどんなだらう、間違っでは居ないだらうかと心配して、西班牙臭くする必要はありません。ただ西班牙風を大体の感じの上に一寸借りたまでです」(西村, 1923, 49-50)。

つまり西村伊作の助言では、日本のスペイン風住宅においては、気軽になんとかスペインっぽさを取り入れる程度で充分であり、スパニッシュ様式建築の特徴である中庭「パティオ」まで要求していない。じっさい日本のスパニッシュ住宅ではパティオが省略されることはとても多い。極端な場合は、白壁とオレンジ瓦だけでもスペイン風住宅として扱われた。じっさい1922年に大阪で開催された住宅改造博覧会に登場した26軒の住宅のうち1軒が、スペイン風の「ミッション式」で、塀を使用してパティオ風を装っているがスペイン本来のパティオとは異なっている(日本建築協会, 1922, 第19図)。

1920~30年代は、日本に拠点を置いた米国人建築家たちが、当時アメリカ西海岸で流行していたスパニッシュ様式を採用することがままあった。セントルイス出身の宣教師で立教大学の校長にもなったガーディナー James

McDonald Gardiner (1857-1925) や<sup>(3)</sup>、バッファロー出身のフラー社の建設技師モーガン Jay Herbert Morgan (1868-1937)<sup>(4)</sup>、アメリカでフランク・ロイド・ライドの下で研鑽を積んだチェコ人建築家レーモンド Antonin Raymond (1888-1976) らで<sup>(5)</sup>、なかでも伝道師として来日したカンザス州出身の建築家ヴォーリズ William Merrell Vories (1880-1964) は<sup>(6)</sup>、スパニッシュ様式をよく好んで用いた。さらにヴォーリズの建築事務所に所属していた松ノ井覚治 (1895-1982) は、コロンビア大学留学とニューヨークでの就業経験もあり、日本人としてスパニッシュ様式を得意とした建築家の一人となった<sup>(7)</sup>。

彼らの影響のもと、日本人建築家の間でもますますスパニッシュ様式が広まっていった。渡米経験のない中村與資平 (1880-1963) は、アメリカに実際に存在するスパニッシュ建築を模倣して、豊橋市公会堂 (1931 年) や静岡市役所 (1934 年) を設計した<sup>(8)</sup>。このような町の象徴となる建物にスパニッシュ様式が採用されたのは、当時の最先端の趣味が反映されたからである。同じころ、久野節 (1882-1962) による近鉄宇治山田駅 (1931 年) に、伊勢神宮への最寄り駅であるにもかかわらず、国粹的な帝冠様式ではなく、スパニッシュ様式があえて採用されたのも、スパニッシュ様式が最新流行に沿った意匠と考えられていたためだ。さらに吉田鉄郎 (1894-1956) 設計の伊勢神宮外宮の前にある旧山田郵便局電話分室 (1923 年) も、印象的なオレンジ色の瓦と、中庭に置かれた石造の八角形の噴水盤が、カトリック系ゴシック様式の四葉模様で装飾されていることから、南欧的な雰囲気が醸し出されている<sup>(9)</sup>。

いずれにしても留学経験のあるなしに関わらず、木子七郎 (1884-1955)<sup>(10)</sup>、安井武雄 (1884-1955)<sup>(11)</sup>、渡辺節 (1884-1967)<sup>(12)</sup>、松田軍平 (1894-1981)<sup>(13)</sup>、森田慶一 (1895-1983)<sup>(14)</sup> など、他の多くの名だたる日本人建築家たちも、1920-30 年代に集中的にスパニッシュ様式の作例を残していったのだ。

地中海に降り注ぐ太陽の日差しから、明るく軽快なイメージに結びつくスパニッシュ建築は、娯楽やレジャー・観光関連の建物との相性が良く、スペイン・地中海を思わせる温暖な海浜町のホテルでは、オレンジ色の瓦と白壁のスペイン風の建物にすることが行われた。熱海の「熱海ホテル」(1922 年<sup>(15)</sup>) (図 1: 左上)、逗子の「なぎさホテル」(1926 年<sup>(16)</sup>) (図 1: 右上)、伊豆大島の「大島観光ホテル」<sup>(17)</sup> (1935 年)、伊東の「川奈ホテル」(1936 年<sup>(18)</sup>) (図 1: 右下) がその好例だ。とくに大島観光ホテルの当時の絵葉書には、海を臨むロマネスク風の三連窓アーチがあるホテルのバルコニーやスペイン風のぶどう棚 (ペルゴラ) とともに、大島の伝統的な衣装を身にまとった島娘の姿が写っており、大島にスペインの南国ムードのイメージが重ねられていたことがよく見てとれる (図 1: 左下)。

また、かつては「山中湖ホテル」(1928 年<sup>(19)</sup>) や、戦後に建った芦ノ湖畔の「箱根ホテル新館」(1951 年<sup>(20)</sup>) まで、湖も海と同じく水辺と解釈されたためか、海浜地で好まれたタイプに似た白壁とオレンジ瓦のスペイン風の建物だった。何度も繰り返すように、スパニッシュ様式は当時ファッショナブルな建築様式と考えられていたため、海浜町でなくとも瀟洒なホテルでは、自然とスパニッシュ様式が選ばれることも珍しくなかった。京都の中心部にある「京都ホテル」(1928 年<sup>(21)</sup>) は、都会らしさを出すために、エントランスの庇部分にある凝った装飾がスパニッシュ様式だった。宝塚のシンボリック存在でもある「宝塚ホテル」(1926 年) には、スペイン瓦のあるパティオがあった (図 2: 右)。その屋根は南欧を思わせるオレンジ色の瓦屋根でも、形状・勾配角度やレリーフの切妻装飾に独ユーгентシュティール様式の要素が見られるが (図 2: 左)、設計者の古塚正治 (1892-1976) は、他の自作品である西宮図書館 (1928 年、1985 年解体) と 2 件の個人邸のファサードデザインにスパニッシュ様式を採用しているので (川島, 2002, 324-325)、宝塚ホテルにも、当時の流行であったスパニッシュの要素を加えたのだろう。古塚による宝塚ホテルは 2020 年に解体され、移転・新築された宝塚ホテルは、旧建物のモチーフを踏襲しつつ、門構えのアプローチのデザインや両翼の建物がスペイン風となり、全体的によりスパニッシュらしさが強調された。これは 1990 年代以降の宝塚市の町づくりが、スペイン・南欧風をモチーフであったことの延長である。宝塚市では、宝塚音楽学校の新講堂 (1990 年)、ちどりビル (1992 年)、宝塚大劇場 (1993 年)、阪急宝塚駅舎 (1993 年)、集合住宅「宝塚 花のみち 1 番館・2 番館」(2000 年)、宝塚北サービスエリア (SA) (2018 年) など、町の主要な建物にオレンジ瓦を使用してスペイン風に統一することを図ったが、その原因となったのは、おそらく初代の宝塚ホテルの外観意匠が、1920 年代当時のドイツで流行していた田舎家風のユーгентシュティール様式の影響下にあったのにもかかわらず、瓦のオレンジ色からの連想でスペイン・南欧風であると誤認されたからではないだろうか。

戦前のスパニッシュ様式は、それが流行の先端を走った建築様式であるという理由から、多種多様な公共建築 (大





図1：当時の観光絵葉書にみるオレンジ瓦と白壁のスパニッシュ風の「熱海ホテル」の外観（左上）；当時の靴ステッカーにみるオレンジ瓦と白壁のスパニッシュ風の「逗子なぎさホテル」（右上）；大島の島娘がスペイン風のパーゴラに佇む姿を写した「大島観光ホテル」の当時観光絵葉書（左下）；繁岡鑿一（けんいち）（1895-1988）による1930年代の「川奈ホテル」の鳥瞰図にみるスパニッシュ風の建物全景（部分、川奈ホテル収蔵）（右下）



図2：独ユーゲントシュティール風だがオレンジ色の瓦屋根で南欧調の印象を与えた「宝塚ホテル」（戦前の絵葉書に掲載された油彩より）（左）；かつて宝塚ホテル本館の中庭（パティオ）にあったスペイン瓦屋根（2018年12月、筆者撮影）（右）

学、駅舎、ホテル、クラブ、オフィスビル）や、中流以上の住宅を中心に日本各地（とくに東京と近郊、東海・京阪神）に広まったのだ。藤森照信氏によるスパニッシュ建築の戦前の建築雑誌掲載事例の調査では、約500棟の事例が確認されている<sup>22)</sup>。なかでも日本のスパニッシュ様式は、洋風住宅を得意とする設計事務所「あめりか屋」の活躍もあり<sup>23)</sup>、その活動拠点と一致する東京と京阪神での住宅で見られることが多く、1920～40年代の住宅関連書籍ではスペイン風住宅が頻繁に紹介されていた<sup>24)</sup>。しかしこういった個人住宅は、その多くが後年解体されてしまっているが、戦前のスパニッシュ住宅は、保全活用されていることも少なくない。とくに著名人の邸宅は記念館となり保存され、著名建築家の戦前のスパニッシュ建築の事例については建築史分野での優れた既往研究が各々の建物や建築家ごとにあるので、本稿では割愛するが、なかでもネーミングが興味深い事例として、通称「スペイン村」と呼ばれて

いる六本木・麻布飯倉片町にある南欧風の意匠を施した長屋「和朗フラット」(1935年)が、今も残っていることを挙げておく(陣内, 1992, 65)。1940-50年代築のスパニッシュ住宅については、まだ築年経過が浅いことから文化財保護の対象として注目されにくいのが、現在、「箱根マイセンアンティーク美術館」として使用されている建物は、東京の青山から移築された日本銀行総裁一萬田尚登(1893-1984)の邸宅で、当時の住宅雑誌で紹介されているような典型的な日本のスペイン風住宅(1940年代)であることもここで付け加えておく<sup>25)</sup>。

また、スパニッシュと同時期に流行した建築様式に、スイスの山小屋風あるいはハーフティンバーのコテージ風もあったことから(河村, 2022)、ときにスパニッシュ様式とスイスの山小屋風あるいはコテージ風が交配するハイブリッド型意匠のスパニッシュの事例が1930年代に数多く見受けられる。例えば、名古屋にあった豊田喜一郎邸(1933年)では<sup>26)</sup>、低層階が、ガウディのグエル公園のような陶片装飾も用いられたスパニッシュ様式で、上階がハーフティンバーの山小屋あるいはコテージ風になっている。福井県南越前町にある11代目右近権左衛門(1889-1966)の邸宅(現・北前船主の館・右近家)の離れ(1935年)も、1階がスパニッシュ様式で2階がスイスの山小屋風だ。ホテル建築では、山中温泉のホテル「河鹿荘」(1936年、1985年解体)と、湯涌温泉の「白雲楼」(1937年、2006年解体)が、スイス風とスペイン風が混在するハイブリッド型意匠であった。これら北陸の3軒のスパニッシュとスイス風のハイブリッド型の事例は、いずれも大林組が設計・施工したという共通項があるのは、当時流行した二つの建築意匠の両方を同時に取り入れようとした企業努力の賜物だろう。

## 2-2. 戦後・高度経済成長期の「青い」瓦もある南欧風(1950-70年代)

戦前までの日本のスペイン風建築の事例は、北米のスパニッシュ様式を端緒として発展したものだだったが、戦後、高度経済成長期の1950~70年代は、日本独自にキッチンにアレンジした南欧風・スペイン風が優勢となってくる。鋳物装飾の柵や手摺、鋳物のランプ・照明器具、スタンドグラス、スパニッシュ仕上げの漆喰白壁、洋瓦を備えた建物が、集合住宅、個人住宅・医院、とくに飲食店で増えていった<sup>27)</sup>。スペイン風を表現するはずの瓦の色が、なぜか南欧風のオレンジ色よりも青色のほうが流行してくるのはこの時代の日本ならではの特徴である。

1950年代に流行した「洋風喫茶店」の建物は、「その建築様式には仏蘭西スタイル、アメリカンスタイル、スパニッシュ、露西亞風、イタリー風等およそ西欧各国の多彩とりどり」(彰国社, 1954, 4)であったという。しかし建物は日本家屋の尺貫法で設計され、西洋建築の比例比率(モジュール)の規範には、天井高や内装も、家具調度・装飾・配置も添っていない。そのため、ヨーロッパの本場の雰囲気とは全く異なった、狭く薄暗い空間のなかで醸し出される日本独自のキッチンな内装の「喫茶様式」がパターン化していった。そんな1950年代という時代には、レコードプレーヤーが高価であったことから、レコードでクラシック音楽を店内で流す「名曲喫茶」というジャンルの喫茶店もも興隆し、アーチ窓と洋瓦や漆喰壁のあるスパニッシュ風の外装を施す名曲喫茶は少なくない。

例えば、東京の新宿・角筈の名曲喫茶「琥珀」の外観は、ロマネスク調スパニッシュであるが、内装はハーフティンバー調の山小屋風である(彰国社, 1954, 66-69)。新宿・歌舞伎町にあった名曲喫茶店「上高地」の外観もロマネスク調スパニッシュであるが、内装にはロマネスクを意識したスタンドグラスを使用しているが、様式がはっきり定まっていなかった昭和テイストな洋風だった<sup>28)</sup>。今も残る数少ない1950年代の名曲喫茶である渋谷の「ライオン」も、ロマネスク調の連窓や尖塔アーチもあるロマネスク・ゴシックなスパニッシュ風な店構えで、内部には「らせん柱(ソロモンの柱)」も使われている。ただし外装に使用されているのは青いスペイン瓦であるが(図3:左)、1970年代までの日本のスペイン風を意識した建物には、なぜか「青い」洋瓦を使ったものが多い。この渋谷の名曲喫茶「ライオン」は、戦災に焼失した1926年の創業時の建物を1950年に同様のデザインで再建したものであるが<sup>29)</sup>、日本のスパニッシュ建築流行の黎明期である1920年代にも、すでに青い瓦が流布していたようだ。青色のスペイン瓦を使った戦前のスパニッシュ建築の事例には、東京の新宿・河田町の旧・小笠原長幹伯爵邸(1927年)(図3:右)<sup>30)</sup>や、鎌倉の旧・前田侯爵家別邸(現・鎌倉文学館)(1936年)があるが、後者は1930年代に流行したコテージ風と混合したハイブリッド型スパニッシュの事例でもある。

1970年代は、青い瓦と白壁と鉄の鋳物の扉、柵、手摺の南欧風装飾を施した分譲マンションシリーズ「秀和レジデンス」が都内を中心に増加するが(谷島/haco, 2022)、喫茶店や美容院といった業種の個人店舗でも、このよう



な青い瓦と白壁の日本独自の南欧風が日本各地で見られるようになる。1970年代のこのような建物に共通するのは、南欧の民家やスパニッシュ建築では不自然なほど急角度な屋根勾配である。これらは南欧というよりも、むしろ北部を含めたフランス各地で見られるアパートマン建築のスレート屋根にみる勾配の影響にあるようだ。そんな急勾配な屋根の使用は、同時期に流行ったオレンジ色の瓦を使用した南欧風の公共建築（マンション、ホテル、個人店舗）でも同様で、おそらく日本の建築基準法に1976年より導入された日照条件（日影規制・北側斜線制限）に合わせようとしたために、本来の南欧建築とはかけ離れた屋根形状と勾配で対応したのが慣例化してしまったのではないだろうか。

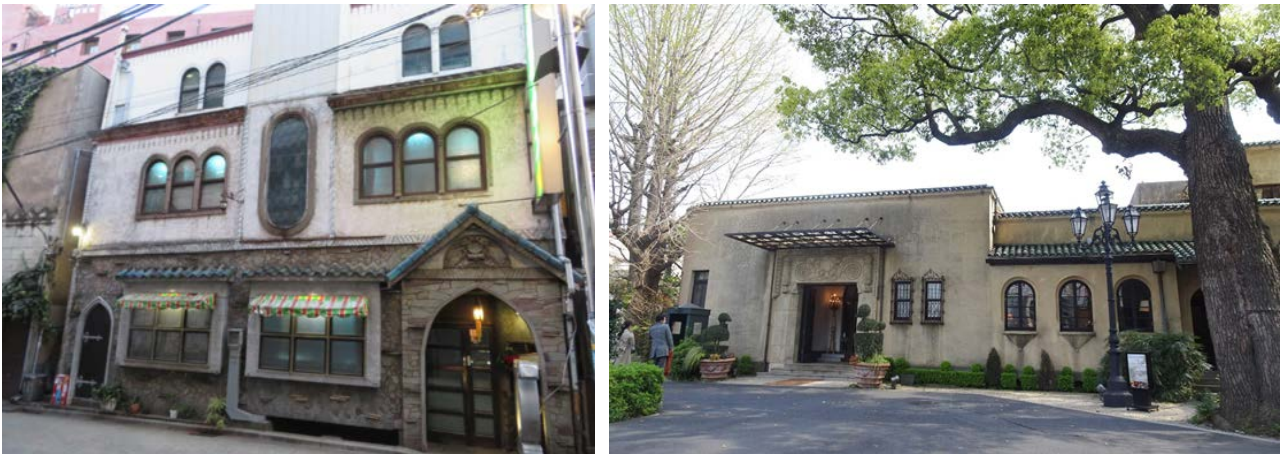


図3：青い洋瓦を使用する日本のスパニッシュ様式建築の例：1950年築の渋谷の名曲喫茶「ライオン」（2018年、筆者撮影）（左）と1927年築の新宿・河田町の旧・小笠原長幹伯爵邸（2020年、筆者撮影）（右）

屋根の形状や勾配が本場南欧の建築とはかけ離れていても、1960-70年代の建物では、オレンジの瓦と白壁、スペイン風の鋳物装飾や照明器具を備えていれば南欧風と名乗っていた。名古屋市千種区のマンション「エスポア覚王山」（1971年）、「逗子マリーナ本館・1～6号棟」（1971～1977年<sup>30)</sup>、「八丈島太洋第一ホテル（現・リードパークリゾート八丈島）」（1974年、竹中工務店）がその例で、千葉県南房総に1967年に開業した「平砂浦グランドホテル」に至ってはまるで仏舎利塔のような形状をした金の尖塔付きの塔屋が二つ付随し（図4：左）、それらが南欧建築の様式と不釣り合いだが、オレンジ瓦と白壁があることから、当時のパンフレットには「光る海、緑とオゾン、そう快な南欧風グランドホテル」と宣伝された（図4：中央）。付属のゴルフ場を売りとして高級路線を目指しており、「南欧風の品格にあふれた」ホテルと絶賛されていた（実業往来社、1971、106）。しかしこの建物は後年解体され、現在はゴルフ場「館山カントリークラブ」のみ営業され、2000年頃に建て替えられた建物は、南房総一帯で流行した、白壁と



図4：「平砂浦グランドホテル」の当時のパンフレット表紙にみる黄金の尖塔の塔屋（左）；同パンフレット見開きページの部分にみる「平砂浦グランドホテル」の全景と宣伝文句「光る海、緑とオゾン、そう快な南欧風グランドホテル」（中央）；このホテル跡地に建った「館山カントリークラブ」（2022年4月、筆者撮影）（右）

オレンジの瓦のシンプルな南欧風である（図4：右）<sup>32</sup>。

1970年代もスペイン風ないしは南欧風であることが「お洒落」であることの記号として機能し、オレンジ色の洋瓦と白壁さえあればスペイン風と称することができた。渋谷の「スペイン坂（スペイン通り）」がファッションストリートとして知名度を上げたのも1970年代である。命名の由来は、1973年開業のファッションビル「PARCO」の裏手にある、石畳の階段の付いたこの歩行者用の裏路地がスペイン的な雰囲気、近くにあったスペイン風の内装の喫茶「阿羅比花<sup>あらびか</sup>」の店主が1975年に命名したことに由来し<sup>33</sup>、のち、同通りにある幾つかの建物も南欧風になった。1978年には、スペイン語の屋号を持つ商業ビル「パティオ」が近くにでき、ファサードの白漆喰壁にはスペインの絵皿が嵌め込まれ、スペイン風に統一された（本間，1989，200）。この「スペイン＝ファッション性が高い」という図式は、戦前のスパニッシュ様式建築が流行の最先端を行くと認識された時代の名残だろうか。いずれにせよ、そのような暗黙の意識は日本独特であり、依然として1980年代以降も続いてゆく。

### 2-3. バブル期のスペイン風・南欧風の建物の商業施設（1980-90年代前半）

オレンジ色の洋瓦と白壁で表現される南欧風の流行は、1980-90年代前半のバブル期にもまた顕著となった。年代を追うごとにディテールはスペイン風に近づいてゆくのだが、1980年代のスペイン風や南欧風と呼ばれる建物は、依然として、白壁とオレンジ屋根や若干の鋳物装飾がある程度であった。当時の新聞や雑誌のメディアでは、よく「スペイン風」、「南欧風」、「地中海風」という言葉を使って、新たに開業する施設が紹介されているが、それらが本来の建築様式とはときに乖離していても、語尾に「風」をつけることで手軽にアピールされてきた。例えば、1986年開業の「島根ワイナリー」は、出雲大社からほど近い立地にできた地元産ワインのテーマパーク的な施設で、その建物はオレンジ瓦と白壁の建物群とヨーロッパの教会の鐘楼のような塔で構成されていることから、「スペイン風<sup>34</sup>」あるいは「南欧風<sup>35</sup>」と紹介された。

温暖な気候と海岸線の立地から、スペインのイメージと結びつけ易いと考えられた南房総では、1980年代後半から「スペイン風・南欧風・地中海風」の建物が増加していった。南房総のリゾート開発への取り組みは、1987年に施行される総合保養地域整備法（以下、通称名の「リゾート法」と記す）の適用を受ける見込みから1986年から始まった<sup>36</sup>。1988年には「房総リゾート開発構想」がまとめられ、鴨川・勝浦の丘陵地で「地中海風<sup>37</sup>」の高級別荘地を造成する計画が立ち上がった。同1988年、館山に開業した白壁にオレンジ瓦の「南仏風」のホテル「オーパ・ヴィラージュ」は（図5：左）、館山を「南欧風<sup>38</sup>」・「地中海風<sup>39</sup>」に整備するきっかけとなった。南房総のなかでもとくに館山市が積極的で、当時の館山市の街並み景観要綱には、「南仏風」ではなく、「スペイン・アンダルシア地方のような景観」を目指すものと書かれていたが<sup>40</sup>、現在の「館山市景観計画」には、スペインだけに限定せず、もっと自由度が増すように配慮されたため「南欧風」と書き換えられている（館山市，2019，1；6；14；22）。

1988年に館山に開業した会員制リゾートホテル「ホテルアクション館山<sup>41</sup>」（レーモンド設計事務所の田辺博司設計<sup>42</sup>）は、「行動」を意味する「Acción」というスペイン語を冠した屋号で、オレンジ瓦に白壁の建物の内外装はアンダルシア風を意識したと思われる「スペイン風」で（図5：右）、家具調度類はすべてスペインからの輸入品である<sup>43</sup>。事業主である日本サン・ランド株式会社（2010年に破綻）は、他にも、福島会の会津高原で「スペインの古城」を模した、ゲレンデ付きの会員制スキーリゾートホテル「ホテルアクション会津高原」（1991年）<sup>44</sup>、軽井沢にも「スペイン風」と宣伝されていた「ホテルアクション軽井沢」（1994年ごろ）を開業させている<sup>45</sup>。

さらに館山では、鏡ヶ浦通り沿いの公衆便所（1992年）、中央学院大学の館山セミナーハウス（1993-98年頃）、下水道処理場の「鏡ヶ浦クリーンセンター」（1998年）が、アンダルシア風をイメージした意匠となった（図6：左）。1999年にはJR館山駅が「地中海沿岸の街並みを参考に」して、「南欧風」の外観に建て替えられ（図6：右）<sup>46</sup>、駅名やトイレの表示板もスペイン風にカラフルなモザイクタイルで装飾された。館山駅から海岸線を結ぶ「夕映え通り」には椰子の樹が植えられ、周辺の住宅や商店も同様にオレンジ色の瓦と白壁で統一された。さらに館山では2000年代になっても、北条海岸沿いでは、オレンジ瓦で南欧風を意識したマンション「東急リゾートヴィラ館山レアーージュ」（2007年）と「レアーージュ館山オーシャンタワー」（2008年）が建設された。

南房総エリアでは、館山以外でも南欧風の町づくりが意識され、1993年に、勝浦の南房総国定公園の景勝地に建





図5：館山の南仏風ホテル「オーパ・ヴィラージュ」(2022年4月、筆者撮影) (左)；館山のスペイン・アンダルシア風の「ホテルアクシオン館山(現・館山リゾートホテル)」(2022年4月、筆者撮影) (右)



図6：館山の下水道処理場「鏡ヶ浦クリーンセンター」(2022年6月、筆者撮影) (左)；JR 館山駅舎(2022年6月、筆者撮影) (右)

つ国民宿舎「鳴海荘」(1969年)を、「地中海風」のホテルに改築する計画が打ち出されていた<sup>(47)</sup>。安房天津駅近くにある鴨川市立安房東中学校(2005年)や、安房鴨川駅(2006年)が「南欧風」に改築されている<sup>(48)</sup>。

1980年代末から1990年代は、リゾート法の施行によって、温暖な海浜地を中心に、スペイン風ないしは南欧風のレジャー施設が次々と建設されていった。以下、完成年の時系列順にそれらの事例を辿ってゆく。

1989年、長崎の伊王島町と第三セクターの「伊王島スポーツリゾート開発」が整備した、白壁とオレンジ瓦で統一された「南欧風<sup>(49)</sup>」または「スペイン風<sup>(50)</sup>」の元スポーツリゾート施設「ルネサンス長崎・伊王島(現・ホテル「i+Land nagasaki」)」では、スペインからシェフを招くなど、スペイン風のリゾート・ホテルとしての側面を重視するようになった。1991年に「スペイン風コテージ」を増設し<sup>(51)</sup>、2000年には「ホテルエスパーニャ」に改名された<sup>(52)</sup>。伊王島では、海水浴場の名前もスペイン語のCosta del Sol(太陽海岸)から「コスタデルソル」と命名され、このホテル周辺のほとんどの建物(港、栈橋、郵便局、バス停、他のホテル・飲食店)が、オレンジ色の瓦屋根となり、スペイン風の町づくりが積極的に行われた。

愛媛県今治市(湯の浦温泉)では、日本食研の「ケーオーホテル」(1991年、2020年閉業)が南欧風で、オレンジ瓦でスペインの修道院のようなパティオのある建物だった(古茂田, 1992, 191-200)。同年、徳島の鳴門市では「白とオレンジを基調にした南欧風デザイン<sup>(53)</sup>」のホテル「マジリゾートナルト(現・アオアヲナルトリゾート)」(1991年)が開業し(図7:左)、後年、オレンジ瓦の南欧風の結婚式用のチャペルも増築されている。徳島から大鳴門橋(1985年開通)で繋がっている淡路島でも、1990年代には白壁とオレンジ瓦の南欧風の建物が盛んに建てられた。淡路島はいぶし銀色の「淡路瓦」の産地であるが、オレンジ色でスペイン風に見える「S瓦」も生産していることも都合がよかった。国道28号線沿いには、オレンジ瓦を載せた淡路市立浦小学校や、淡路市立学習小学校があり、



2005年に新築された兵庫県立津名高等学校は建設年代が新しいため、他の施設と比較してディティールの格段な進化がみられ、スペインのパラドールを思わせるような外観だ<sup>54</sup>。なお、島内の志筑新島（津名町）には、「地中海風」の街並みをイメージした商店街「カリヨン広場」（1993年、津名町）もあり（図7：右）、3つのメインストリートが「エーゲ通り」「ラテン通り」「スペイン通り」と命名されている<sup>55</sup>。オレンジの瓦屋根にパステル暖色の外壁の2-3層建ての建物が立ち並び、各々の建物に入居していた開業当時の店舗の多くが現存せず、学習塾や事務所、他の店舗に入れ替わってすっかり商店街としての活気を失ってしまっている。

#### 2-4. バブル期以降のスペイン風・南欧風の建物の商業施設（1990年代後半から2000年代へ）

すでにバブル経済は崩壊しているにもかかわらず、1994年前後は、南欧風・スペイン風・地中海風の施設の開業ラッシュが集中していた。長崎・佐世保市では、第三セクターの「西肥リゾート開発（藤田観光）」によって、「地中海の街並み」をモデルにした、大成建設によって建設されたテーマパークのようなリゾートホテル「西海橋コラソンホテル（現・大江戸温泉物語 西海橋コラソンホテル）」が1993年に開業した（高橋／出野, 1994, 7）。屋号にスペイン語 Corazón（心）を使用しているが、暖色系の外壁の色合いや建物の形状からすると、イタリアのリヴィエラ海岸のポルトフィーノのような町並みをモデルにしたと思われる。

1994年は、高知県香南市の手結山<sup>ていやま</sup>に、地元の製菓業「浜幸」の菓子工場と果樹園を併設した「スペイン風」の建物のリゾート施設「オーシャン・プランテーション手結（現・リゾートホテル海辺の果樹園）」が開業した<sup>56</sup>。「地中海風のリゾートゾーンとする<sup>57</sup>」コンセプトであったが、オレンジの瓦と外壁が暖色系のパステル色で塗られたシンプルな建物で、南欧や地中海らしさは希薄である。なお、同市の三宝山の山頂には、スペインの古城を模したという旧・娯楽施設「シャトー三宝」があり<sup>58</sup>、1973年の開業当時からの自然環境や気候から、スペイン風のイメージがこの地では連想されていたようだ。



図7：徳島・鳴門のホテル「アオアヲナルトリゾート（旧・マジリゾートナルト）」（2022年6月、筆者撮影）（左）；淡路島にある地中海風の町並みをイメージした商店街「カリヨン広場」（2022年6月、筆者撮影）（右）

沖縄でもその自然環境と気候とから、スペイン風のリゾート施設が幾つかできている。1994年に開業した、読谷村<sup>よみたん</sup>のヨミタリゾート沖縄の「ホテル日航アリビラ」は、「スパニッシュコロニアルに現代的なアレンジを加え」たデザインの建物である（佐藤工業, 1994, 20）。一方、恩納村・瀬良垣に1995年開業予定だった「プリマベラ・リゾートホテル<sup>59</sup>」は、「南欧・地中海をイメージし、スペイン風のホテル」にする計画であったが、実現しなかった<sup>60</sup>。

1996年に開業した、埼玉県深谷市にある「深谷グリーンパーク」内の「アクアパラダイス・パティオ」は、ごみの焼却熱を利用した屋内温水プールであるが<sup>61</sup>、ネーミングにイタリア語の acqua（水）とスペイン語の patio（中庭）が入った南欧風の建物で、「内装にパステルカラーを使い、天井を高くするなど南欧や地中海沿岸のリゾート地をイメージ<sup>62</sup>」したというとおり、外観はオレンジ瓦と白壁のスペイン風で、屋内プールの内装は、塔の多いイタリアの

中世都市サン・ジミニャーノを思い起こさせるデザインとなっている。

1998年は、本土（神戸市舞子町）と淡路島を結ぶ「明石海峡大橋」の開通に合わせて、ドライバーらのための施設「県立淡路島公園ハイウェイオアシス」（1998年）が、「南欧風」の建物で開業し<sup>63</sup>、1999年には、淡路瓦を使った「南欧風」の校舎をもつ「淡路景観園芸学校」も開校した<sup>64</sup>。

愛媛県宇和島市でも、1998年、JR宇和島駅舎が、オレンジ瓦を使った南欧風の建物に改築されている。もともと闘牛が行われていた歴史と、闘牛といえばスペインを連想することと、温暖な気候の土地柄から、駅前広場にある椰子の木も相まって南欧ムードが醸し出された。

同1998年、三井財閥の鉱山が閉山した熊本県大牟田市近くの南関町の丘陵地帯で<sup>65</sup>、大型商業施設が付随した「南欧風<sup>66</sup>」建築の大型ホテル「セキアヒルズ（現・ホテルセキアリゾート&スパ）」が開業した。人工スキー場まで兼ね備え、南欧のリゾート地のように、滞在スタイルも「南欧風」に連泊してもらえるように工夫された<sup>67</sup>。建物の外観は、南欧風といってもスペイン風ではなく、オレンジ瓦の使用はなく陸屋根で、外壁の淡い暖色系パステルカラーは、カプリ島の高級ホテルを思わせる。

1990年代から2000年代にかけては、南欧風の町並みを再現する施設は、ショッピングセンターやアウトレットモールで流行するようになる。最も早かった事例は、1989年に開業した横浜市中区本牧の「マイカル本牧（現・イオン本牧）」で、スペイン風の5つの建物から形成された商業施設で<sup>68</sup>、1990年に横浜まちなみ景観賞を受賞し、後年建った「パークシティ本牧」のクラブハウス管理センターもスパニッシュ風の建物となっている。さらに1999年には、神戸市垂水区に南欧の港町を再現した三井アウトレットパーク「マリニピア神戸ポルトバザール」と<sup>69</sup>、南欧風の街並みのイメージした商店街「都城みやこのじょうオーバルパティオ」が宮崎県都城市に開業している<sup>70</sup>。ただし前者は2023年1月に閉業・解体され、建て替え工事中である。

東京・田園調布では、1990年に解体された歴史的な駅舎建築（1923年）が2000年に復元されたさい、南欧風をコンセプトに、田園調布駅前周辺にできた商業施設「東急スクエアガーデンサイト」が、2000-2004年に開発された。同じく東急不動産は2003年に、大阪府箕面市で、仏大手スーパーマーケット「カルフル」を含む、南欧の町並みをイメージした大型商業施設「箕面マーケットパーク・ヴィソラ」も開業させている<sup>71</sup>。

2006年には茨城県大洗町に、アメリカのモリソン・ムラカミ・アーキテクトの設計によって、南欧のリゾート町をイメージしてデザインされた「大洗リゾートアウトレット（現・大洗シーサイドステーション）」が開業した<sup>72</sup>。小規模な事例だが、2009年には大津市の住宅街の青山地区に、南欧風の商業地区「プロムナード青山」もでき<sup>73</sup>、2012年4月に開通した新東名高速道路のサービスエリア「NEOPASA（ネオパーサ）駿河湾沼津PA（上り）」は、駿河湾の景色が臨めることから、地中海の港町をイメージしたテーマパークのような南欧風の街並みをコンセプトとしている<sup>74</sup>。

### 3. 姉妹都市提携を機に生まれた南欧風の建物の施設

#### 3-1. スペインとの姉妹都市提携から生まれたスペイン風の建物の施設

スペインと日本の姉妹都市関係は、当初は交流史的な経緯によるものからはじまったが、バブル期には気候や地形の相似から、三重県と和歌山県が、それぞれバレンシア州とガリシア州と、県・州単位で姉妹関係となり、主にこの二つの県を中心に、スペインをモチーフにした商業施設が数多く誕生している。それらの町にスペイン風の建物ができた例を、日本とスペインの町で結ばれた姉妹都市提携の歴史を踏まえたうえで、以下時系列順に追ってゆく。

最初に誕生したスペインと日本の姉妹都市関係は1972年、カスティージャ・ラ・マンチャ州トレド Toledo と奈良市で、両者ともに国を代表する古都であった共通点から締結された。つぎに1980年、ナバラ州パンプローナ Pamplona と山口市が姉妹都市となった<sup>75</sup>。パンプローナは、宣教師フランシスコ・ザビエル Francisco de Xavier（1506-1552）の生家「ハビエル城 Castillo de Javier」に近い町で、ナバラ王国と山口の関係は、16世紀半ばにザビエルが山口で布教活動を行ったことに遡る。ザビエル没後400周年記念事業として、山口市に建設されたカトリック教会「ザビエル記念聖堂」（1952年）が、スペイン建築の再現事例としては早く、すでにハビエル城に隣接する教会 Basilica

de San Francisco Javier（1901年）を模した意匠だったが、1991年に焼失してしまった<sup>76)</sup>。

1990年には、香川県丸亀市とバスク国自治州のサン・セバスティアン San Sebastian が姉妹都市となるが、スペインのカトリック宣教師が1956年に設立した丸亀聖母幼稚園の当時の園長の出身地に因んだことによる。ここまでが、歴史的背景から姉妹都市となった事例であるが、これらの町では、姉妹都市提携をきっかけに、スペインをモチーフにした大規模な商業施設の開発は行われなかった。地形・自然・気候が似ているスペインの町と姉妹都市提携をしながら、スペインをモチーフにしたリゾート開発が集中したのはバブル期の1990年代前半である。

1992年、バレンシア州と三重県が姉妹提携をした。自然環境と気候、陶器や家具などの地場産業の類似や、バレンシアがスペイン唯一の米の産地であることがその要因だったが、1987年のリゾート法施行で、国土庁から承認第1号を受けた三重県がすでに1983年に用意していた「三重サンベルトゾーン構想」で、伊勢から熊野までの沿岸エリアをスペインのコスタ・デル・ソルのイメージでリゾート開発する計画も関係あった（中西, 1994, 8）。この地域を特徴付ける「リアス式海岸」の「ría」は、もとはガリシア語で、スペイン・ガリシア州によくみられる海岸線の形状を指す。その州都は一大巡礼地のサンティアゴ・デ・コンポステーラであり、三重県には伊勢神宮へのお伊勢参りの巡礼地があるという共通項も、この計画を後押しした（小川, 1991, 95）。そのようななか、伊勢志摩国立公園の中央部を占めている磯部町では、近畿日本鉄道によって、南欧風の建物で景観を統一させる開発計画が立ち上がった（福井, 1990, 148）。当初は、別荘地とゴルフ場の建設を予定していたが、1988年、スペインの町を再現するテーマパーク「パルケエスパーニャ Parque España（スペイン公園）」を中核に、ホテル「ホテル志摩スペイン村」、レジデンシャルゾーンから構成される「志摩スペイン村」の造成へと方針が変更された（中西, 1994, 6）

最初に完成したのは1992年、賢島（志摩市）のレジデンシャルゾーンにできた会員制ホテル「プライムリゾート賢島（現・都リゾート志摩ベイサイドテラス）」である。このホテルの完成をみる前に逝去した、近鉄の会長、佐伯勇（1903-1989）氏は、「賢島の開発のイメージは（南仏の）ニース Nice」と言い残していたこともあり（中西, 1994, 9）、英虞湾に面した立地は地中海に見立てられた。ホテルはオレンジ瓦と白壁のアンダルシア風の建物で、鹿島建設によって設計・施工された。アルハンブラ宮殿のパティオをモデルにした中庭が二つあり（図8：左）、その中庭や通路の床にはスペインから取り寄せたテラコッタタイルが敷かれた<sup>77)</sup>。階段の蹴上にはスペイン製の幾何学模様タイルが貼られ、壁には廊下や客室に至るまでスペインの伝統工芸品である手描き皿が随所に架けられた。庭からアクセスするメゾネットタイプの客室も用意されたアンダルシア風の建物のゾーンもあるが、全館を通じての雰囲気は、スペインに限定されない地中海リゾート色が優勢である（図8：右）。なお、レジデンシャルゾーンには、他にもスペイン風のマンション、コンドミニアムやコテージといった別荘用の建物群を計画していたが<sup>78)</sup>、バブル崩壊のため実現しなかった。



図8：ホテル「都リゾート志摩ベイサイドテラス（旧・プライムリゾート賢島）」の客室棟にあるパティオの一つ（2022年10月、筆者撮影）（左）；地中海風の雰囲気で作られたホテル「都リゾート志摩ベイサイドテラス（旧・プライムリゾート賢島）」（2022年10月、筆者撮影）（右）



「プライムリゾート賢島」開業の翌年にあたる1993年は、浜島エリアで地中海沿岸各国の村を再現したかのような、スペイン製の家具付きの会員制別荘「志摩地中海村」が誕生した。「志摩地中海村」の基本コンセプトは、本格的なスペインと地中海の街を創出することであり、その発起人は、日本青年社長会（YPO）のメンバーたちだった。その中心人物のひとりには、伊勢志摩観光の定番土産で知られる餅菓子の（株）赤福の当時の社長の濱田益嗣<sup>79</sup>氏もいた。彼は、「志摩地中海村」の近くに、ゴルフコースも備えた広大な敷地に、保養所機能を備えた別荘である「六浜亭」を、すでにスパニッシュ様式で建てていた。濱田氏が世界各地を旅した結果、地中海沿岸の風景と町並みがとくに気に入ったためである。さらには、スペイン料理店「アミーゴ」も経営していた<sup>79</sup>。スペイン語で「友達」を意味するこの店名の由来は、前述した日本青年社長会（YPO）のメンバーとの友情を表すものである。そのため今も「志摩地中海村」のロゴは、「村」を意味するスペイン語のPuebloと、このレストラン名Amigoの頭文字から成るPAを、太陽光線に見立てて飾ったデザインとなっている。1989年、濱田氏は、日本青年社長会（YPO）のメンバーとともに、スペイン含む南欧・地中海建築を再現した別荘地をつくる構想を温め、株式会社「志摩地中海村」を設立した。同じころ濱田氏は、三重県スペイン友好親善会の会長も努め、その時にスペイン・インテリア協会の副会長ルイス・コルベリャ Luis Corbella氏と知己となり、彼に「志摩地中海村」の監修を依頼した。コルベリャ氏が提案したデザインコンセプトは、村らしさを表現する「ルスティカ rustica（田舎家風）」である。1991年、「志摩地中海村」の設計・施工は清水建設に決まり、設計者・関係社員の一行は、スペイン・アンダルシアの村々（セテニール Setenil、カサレス Casares、マルベリャ Marbella）、カスティーリャのトレド、イタリアのサルデーニャ島のエメラルド海岸 Costa Smeralda を数回にわたって訪問し、視察を行わなかったカスティーリャのラ・アルベルカ La Alberca やイビサ Ibiza 島の町並みも参考にした<sup>80</sup>。

このユニークな会員制別荘地「志摩地中海村」では、以下3種類のゾーンに分けてスペインの町並みが再現された。西側に「カスティーリャゾーン」（8邸）（図9：左）、東側に「アンダルシアゾーン」（10邸）、村へのエントランスがある中央部での「イビサゾーン（現サルジニアゾーン）」（8邸）である。

「カスティーリャゾーン」の建物は、カスティーリャ＝ラマンチャ Castilla-La Mancha の都トレドとその周辺を参考にした山岳都市の村の民家をイメージしているが、宿泊棟とは別途に設けられた共有部分である「黄金のサロン」の内装は、幾何学模様のタイルを多用したアラブ風のムデハル様式となっている。

「アンダルシアゾーン」は、先に述べた視察先のアンダルシアの村々のほか、フリヒリアナ Frigiliana やミハス Mijas の民家をモデルとし、日本で最も人気のあるスパニッシュ様式建築の源流となる、白壁とオレンジのスペイン瓦の家が並ぶ町並みが再現されている。

「イビサゾーン」は、スペインのイビサ島とマヨルカ島のイメージでデザインされているが、このゾーンの主要な建物は、じつは伊サルデーニャ島の高級リゾートであるエメラルド海岸 Costa Smeralda のものを参考にしてつくられた。例えば、別棟に建てられた会員の共有のクラブハウス（現・レストラン「RIAS by Kokotxa」のある棟）は、暖色の壁面と独特な有機的な曲線美が印象的であるが、この建物は内外装ともに、エメラルド海岸の最高級ホテル「カーラ・ディ・ヴォルペ Cala di Volpe」の意匠を模したものである<sup>81</sup>。そのため「イビサゾーン」は、サルデーニャ島のイメージ通り「サルジニアゾーン」と後年改名され、現在に至っている。屋根瓦、テラコッタタイル、木製建具、玄関扉、家具、鋳物の照明器具、壁掛け用の絵皿はスペインから輸入され<sup>82</sup>、サルデーニャの山羊や鶏の形をした伝統陶器も飾られた。

道案内の表示版もスペイン製の手描きタイルが使用され、屋内外の壁画の一部はスペイン人画家マノロ・ヒメネス Manolo Jimenez による（高木，1993，187）。このように本場らしさを演出できるようにディテールにも細かい配慮がなされたが、マリア様の祠など、カトリック的な装飾はあえて再現しないようにした。

以上「志摩地中海村」は、全26邸で始まった会員制高級別荘として誕生したが、バブル期の別荘ブームが去ってゆくと、オーナーたちの足は次第に遠のいてゆき、2002年には10室がホテルに転用にされ、別荘村とホテルが共存するようになる。そして2010年には別荘としての機能を一部残しつつ、村ごと31室のホテルとなった。そして2016年の伊勢志摩サミットの開催を機に、新たな宿泊施設「志摩地中海村」として再生するための拡張計画が打ち出された<sup>83</sup>。「志摩地中海村」は、サミット会場であった賢島の志摩観光ホテルの対岸にあり、その全景がよく見える。

2018年、敷地の東西の両端部を増築して二つのゾーンが追加された。西側には、ギリシャのミコノス Mykonos 島とスペインのメノルカ Menorca 島の白亜の街並みをイメージした「ミコノルカゾーン」(図9:右)、東側の端には、アンダルシア地方のグラナダにあるアルハンブラ宮殿の浴場ハマムの意匠を取り入れた天然温泉浴場のある「アルハンブラゾーン」が新規に加わり、今の姿となった<sup>84)</sup>。



図9：志摩地中海村の「カスティーリャゾーン」の一角(2022年10月、筆者撮影)(左)；志摩地中海村の「ミコノルカゾーン」の一角(2022年10月、筆者撮影)(右)

一方、「地中海村」開業の翌年にあたる1994年には、同時期に計画が進んでいた磯部町の「志摩スペイン村」内のテーマパーク「パルケエスパーニャ」と、その隣のアンダルシア風のオフィシャルホテル「ホテル志摩スペイン村」もオープンした<sup>85)</sup>。このホテルには、コルドバ Córdoba のメスキータ(大モスク)を模したアラブ風のロビーや噴水もあり(図10:左)、タイルや床材、家具・調度品、壁掛け装飾用の工芸絵皿などはスペインから輸入したものだ(中西,1994,10)。一部の客室の内装は、2年前に先行オープンした、同じく近鉄による、会員制ホテル「プライムリゾート賢島」とよく似ているが、客室数など、「ホテル志摩スペイン村」のほうが規模は大きく、客室番号を示す表札にまでスペイン製の工芸タイルが使用されている。

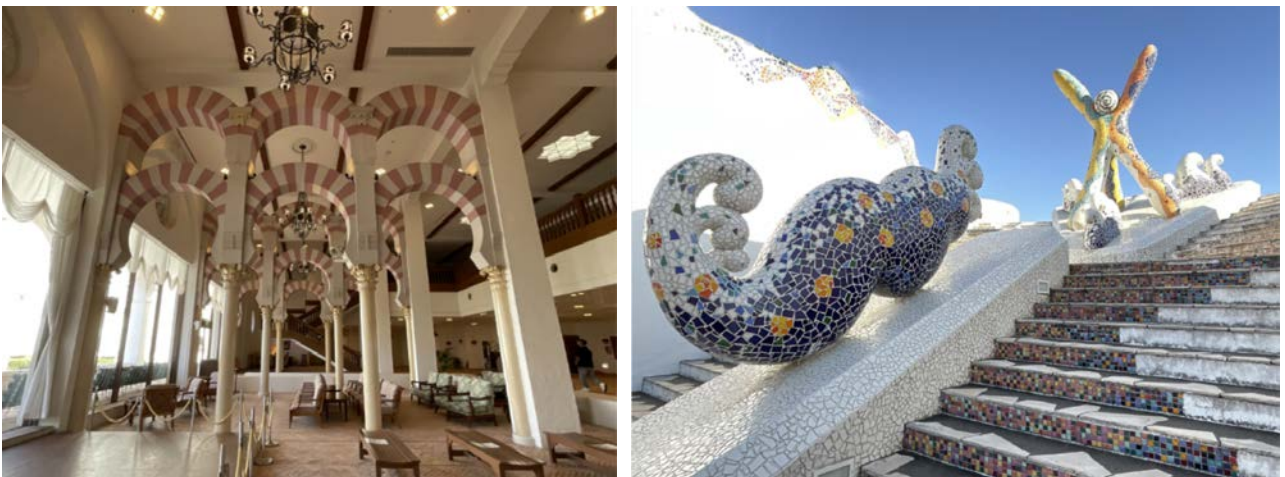


図10：「ホテル志摩スペイン村」のコルドバのメスキータを模したロビー(2022年10月、筆者撮影)(左)；「パルケエスパーニャ」にあるガウディのゲレル公園をイメージしたモザイクタイル貼りの広場の階段(2022年10月、筆者撮影)(右)

34ヘクタールを占めるスペインの都市や田園をイメージしたテーマパーク「パルケエスパーニャ」は、スペイン語名で「シウダード ciudad(都市)」、「ティエラ tierra(大地)」、「マール mar(海)」、「フィエスタ fiesta(祭り)」と、それぞれのテーマに沿った4つのゾーン分けがなされていたが、現在はこの名称区分は無くしている。スペインの建

物の再現も、アトラクションのアップデートなどで、後年一部改築され、本場スペインらしい装飾ディテールが撤去されたものもある。

「シウダード」ゾーンには、スペインの代表的な都市を象徴する歴史的建造物を模した建物が集められた。1929年のセビーリャ万博の会場として造られた「スペイン広場 Plaza de España」の塔のデザインを再現したメインゲート、バルセロナの目抜き大通り「ランブラス通り La Rambla」をイメージしたアーケード商店街の「エスパーニャ通り」(総合交通社, 1994, 10)、マドリードの「シベレス広場 Plaza de Cibeles」にある「シベレスの噴水 Fuente de Cibeles」のレプリカ、「マヨール広場 Plaza Mayor」を模したレストランとスペインの工芸品店が入った建物とフェリペ3世の騎馬像のレプリカ、「アランフェス王宮 Palacio Real de Aranjuez」の正面玄関を模した建物(内部には、闘牛をテーマにした屋内ジェットコースターがある)といった具合である。

遊園地の遊具施設が多い「フィエスタ」ゾーンには、スペインの山「モンセラート Montserrat」をモチーフにしたジェットコースター、バルセロナのガウディの「グエル公園 Parc Güell」をイメージして、色とりどりのモザイクタイルで飾られた広場がある(図10:右)。1997年には、イベリア半島のピレネー山脈をモチーフにしたジェットコースター「ピレネー」も加わった。

「ティエラ」ゾーンには、トレドの「カンブロン門 Puerta del Cambrón」のようなファサードの映画館「カンブロン劇場」(図11:左)、シェリー酒の産地であるアンダルシア州の町ヘレス・デ・ラ・フロンテーラ Jerez de la Fronteraにある、シェリー酒の代表的な銘柄「ティオ・ペペ Tio Pepe」を生産するゴンザレス・ビヤス Gonzalez Byass 社の酒蔵工場の建物をイメージした「ドンキーズ・シェリー(現在は「氷の城」)」というアトラクションが入った建物や、アルハンブラ宮殿への入り口である「グラナダスの門 Puerta de las Granadas」のレプリカがある(図10:右)。



図11: 「パルケエスパーニャ」にあるトレドのカンブロン門を模した「カンブロン劇場」(2022年10月、筆者撮影)(左); 「パルケエスパーニャ」にあるアルハンブラ宮殿のグラナダスの門のレプリカ(2022年10月、筆者撮影)(右)

その門をくぐった先にある「マール」ゾーンにあるのは、まずガリシア地方の穀物倉庫「オレオ Hórreo」<sup>86)</sup>、セビーリャ Sevilla のサンタ・クルス地区 Barrio Santa Cruz を模した「サンタクルス通り」(図12:左)、バルセロナにあるコロンブス記念碑をスケールダウンしたレプリカ(台座を除く)で、フランシスコ・ザビエルの生家「ハビエル城」を模した建物内の「ハビエル城博物館」(図12:右)には、ここを含めて世界に4つしかないアルタミラの洞窟 Cueva de Altamira の壁画のレプリカも展示された<sup>87)</sup>。

1994年の「パルケエスパーニャ」の開業から2007年まで、志摩スペイン村へアクセスできるバスが発着していたのは、近鉄の「志摩磯部駅」前だったため、まずこの駅本体がスペイン風にデザインされた(総合交通社, 1994, 17)(図13:左)。開業年が記されたスペイン製の彩色タイルや、壁の随所にはスペイン製の手描き絵皿が掛けられた。八角形のドーム天井は、それぞれの面にスペインをテーマにした絵柄のステンドグラスがはめ込まれた。それらはドン・キホーテ、トレドの城門、コロンブスの帆船、王者の獅子、ラ・マンチャの風車、セゴビアの水道橋、オリー





図 12：「パルケエスパーニャ」の「サンタクルス通り」(2022年10月、筆者撮影) (左)；「パルケエスパーニャ」にあるフランシスコ・ザビエルの生家「ハビエル城」を模した建物の「ハビエル城博物館」(2022年10月、筆者撮影) (右)

ブの樹、バレンシアのオレンジといった、以上8つのテーマで各面が飾られた。

合わせて周辺の公共建築もスペイン風に整備された。駅前にある三十三銀行(磯部支店)や、磯部バスセンターもスペイン風の建物で(図13：右)、他にもスペイン名が付いたマンション「エスペランサ磯部」(1997年)、スペイン風を若干意識した外装のホテル「リゾートイン磯部」(1998年開業、2020年閉業)、その隣にある木場公園にはアンダルシア風の公衆便所ができた。近隣のガソリンスタンド(ENEOS志摩スペイン村前SS)もアンダルシアの教会のようなデザインになっている。当時の新聞では、「周辺で、南欧風の建築物が続々と増えている。駅や銀行、警察官駐在所。オレンジの屋根に白壁の建物は今後も誕生しそうだ。」とその様子が意気揚々と伝えられていた<sup>88)</sup>。1995年には磯部町とバレンシア州のスエカ Sueca が姉妹都市となっていた。しかし、2004年に志摩市に吸収され磯部町が廃止されると、姉妹関係も解消された。

そして、志摩スペイン村に最も近い駅は、そもそも志摩磯部駅ではなく鵜方駅であるため、2007年をもって志摩スペイン村へのアクセスの起点は鵜方駅へ移り、志摩磯部駅周辺は、もうスペイン風の建物で飾られることはなくなった。現在、志摩磯部駅の乗降者人数は激減しエスカレーターは使用できないように蓋がされている。かつて壁面を飾っていたスペインの工芸皿も剥離して失われたものも多く、外壁はすす汚れが目立つ寂れた駅となってしまった。また、鵜方駅自体はスペイン風の建物ではないが、駅前には、志摩スペイン村へのアクセスを配慮した、ゴシック様式で南欧風の店舗・雑居ビルが建っている。



図 13：志摩磯部駅舎(2022年10月、筆者撮影) (左)；磯部バスセンター(2022年10月、筆者撮影) (右)

志摩周辺のスเปน嗜好は、バブル崩壊後も続き、1995年には、大航海時代の帆船カラックをモデルにした観光船「エスペランサ」が、賢島から出航し今に至っている。老舗名門ホテル「志摩観光ホテル」が館内で展示している美術品にも、ブロンズのドン・キホーテの頭部像や驢馬サンチョ・パンサにまたがるドン・キホーテ像が置かれているのは、すべてバブル期におこった三重県をスเปนに見立てたりゾート開発の影響によるものである。

とはいえ、もともと三重県が姉妹関係を結んだのはバレンシア州であるにもかかわらず、三重のリゾート・観光施設の建物のほとんどは、ドン・キホーテの舞台でもある、オレンジ瓦と白漆喰壁のアンダルシアの民家が参考にされた。それは、日本人のスเปนに対する直感的イメージが、視覚的に分かりやすいアンダルシア風の建物であることと、海に面した南国アンダルシアの雰囲気志摩のリゾート開発に向いていたからだ。

バブル崩壊後、バレンシア州の町と姉妹都市になったのは、兵庫県豊岡市とアリカンテ Alicante (1996年)、山口県宇部市とカステジョ・デ・ラ・プレーナ Castelló de la Plana (2019年)である。前者は、皮革産業という共通項があるため、宇部市の場合は、カステジョ・デ・ラ・プレーナ市から、宇部興産株式会社を通じて親書が届いたことがきっかけだった<sup>89)</sup>。両市ともにスเปน風を意識した特段目立った公共の建物は見当たらないが、宇部市では2003年にスเปนの村をモデルにした結婚式場・レストラン「風のみえる丘フェリース」(図14:左)ができた<sup>90)</sup>。



図14：2003年にオープンした宇部市のスเปนの町並み風の結婚式場「風のみえる丘フェリース」(宇部市あすとぴあ 2-2-3) (2013年5月撮影のGoogleストリートビュー写真、2022年11月3日閲覧) (左); JR宇野駅舎—現在はオーストリアの画家エステル・ストックカーの Esther Stocker によるアート作品として黒の抽象的な線が白い壁面に描き込まれている (2022年7月撮影のGoogleストリートビュー写真、2023年1月9日閲覧)

リゾート法によるリゾート開発の機運から、バブル期前後は、アンダルシア州の町と姉妹都市提携がよく結ばれた。1990年、広島県呉市は、地形や気候の類似から、アンダルシア州マラガ県の町マルベリヤと姉妹都市になる。その理由はすでに呉市が1989年より「くれフェニックス計画」と称して、天応地域の埋め立て地に、マラガ県のリゾート地「コスタ・デル・ソル Costa del Sol (太陽海岸)」をテーマにした「呉ポートピアランド」を建設する計画を、阪急電鉄と三菱総合研究所とともに進めていたことによる<sup>91)</sup>。「呉ポートピアランド」は1992年に開業し、園内には、コスタ・デル・ソルの町並を再現した「アーチ通り」や、シンボルドームであるスเปนの教会風の店舗棟や遊園地施設(観覧車、メリーゴーランド、ジェットコースター)、ドン・キホーテ像などがあり、最寄りのJR呉ポートピア駅舎、公衆トイレ、天応浄化センターの建物も、アンダルシア風を意識したオレンジ瓦と白壁の建物で統一された。この呉ポートピアランドは、1998年に経営破綻し閉業したが、2000年より「呉ポートピアパーク」と改名し、無料の公園となり現在に至っている。

なお、呉ポートピアランドが開業した1992年は、コロンブスのアメリカ大陸発見500周年であり、スเปน本国では、同年にバルセロナオリンピックとセビリア万博が開催され、日本ではバブル景気も相まってスเปน旅行の人氣が高まっていた。その前年の1991年はコロンブスのサンタ・マリア号が復元され、それに乗船しに行く日本人も少なくなかった。その結果、1492年にサンタ・マリア号が出港したアンダルシア州の港町パロス・デ・ラ・フロン

テラ Palos de la Frontera と岩手県大船渡市が、1992年に姉妹都市となっている。というのも、大船渡市が、マルコポーロが日本を「ジバング（黄金の島）」と言及する由来となる金の産出量が多かった土地であったことと、復元船の出港式に出席していた大船渡市長の一行とパロス市が懇意となったからである。コロンブスの復元船はバルセロナから出港し、最終的に神戸市に寄贈され、バルセロナ市と神戸市も1993年に姉妹都市関係を結んだ。このように、コロンブスのアメリカ大陸発見500周年の一連のイベントは、バブル期に盛んだった自治体の海外視察旅行によって、スペインの町々と幾つもの日本の町が姉妹都市関係となった。1994年の愛知県清須市とアンダルシアのヘレス・デ・ラ・フロンテラ Jerez de la Frontera との姉妹都市提携も、1992年のセビリア万博に視察で訪れていた清洲町国際交流委員会と、ちょうど日本との姉妹都市提携を検討していたヘレス市が出会ったことによるものだった。

やがて、1993年に登録されたユネスコ世界遺産「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」に誘発され、同じく巡礼路である「熊野古道」を擁する和歌山県が、サンティアゴ・デ・コンポステーラ Santiago de Compostela のあるガリシア州と1998年に姉妹関係に入ったが、ほとんどの日本とスペインとの姉妹都市締結は1990年代前半に集中しており<sup>92</sup>、バブル期の南欧への憧れが如実に反映されていたことがわかる。

1994年は、世界リゾート博が「和歌山マリーナシティ」で開催されるのにあわせて、地中海沿岸の南欧の街並みを再現したテーマパーク「ポルトヨーロッパ」(1994年、松下興産)が開業した<sup>93</sup>。デザイン設計は、米ユニバーサルスタジオを経営しているMCA社に委ねたもので、「スペインの古城、イタリアの港町の漁村、市役所・裁判所等が立ち並ぶ伝統的なフランスの街をモチーフ」にした建物が並び、それらには古色蒼然とした雰囲気を出すための「エイジング」加工がされた。当時はまだ日本では、エイジング加工は珍しく、国内では東京ディズニーランドぐらいいしか行っていなかった(アミューズメント産業, 1994, 151-152)。「ポルトヨーロッパ」にできたスペインの古城のモデルは不明で、「フランスの街並み」を模したエリアは、フランスというよりもスペインの町並みに見えるが<sup>94</sup>、南欧風であることには変わりなく、近くに建設されたマンション「ソルカサ・デル・マール Solcasa del Mar」(2001年)や「ヴォラーレ・デル・マーレ Volare del Mare」(2004年)は、南欧風の外観で名前も西語や伊語になっている。やがて「ポルトヨーロッパ」は、テーマパークとしての人気が低迷したため、2016年に無料化した<sup>95</sup>、現在はSNS映えの撮影スポットや映画のロケ地としての需要が高まっている。

志摩スペイン村のテーマパーク「パルケ・エスパーニャ」や、和歌山マリーナシティの地中海テーマパーク「ポルト・ヨーロッパ」が開業した1994年は、スペインの町とどこも姉妹都市を結んでいない岡山県玉野市にも、スペインのテーマパークの建設計画があったが頓挫している。第三セクターで、愛称「プエルト・コロン Puerto Colón (コロンブスの港)」こと「岡山スペイン村」という名で<sup>96</sup>、1988年の瀬戸大橋開通による玉野港のフェリー路線への打撃を講じる策として、すでに1985年頃から同地に工場を持つ三井造船が進めてきた(川久保, 1992, 73)。この幻となった「岡山スペイン村」は、JR宇野駅近くの国鉄清算事業団用地など約5ヘクタールの土地にスペインの街並みを再現する計画であった。バブル崩壊でめどが立たなくなってしまったが<sup>97</sup>、1994年、JR宇野駅舎はオレンジ瓦に白壁にゴシック尖塔アーチ窓の付いた南欧風に新築された(図14:右)。あわせて市役所前に建てる予定だった大型商業施設「アルハンブラモール」や「ガウディタワーシティー」の建設は取り止めとなった<sup>98</sup>。一方、同市の王子が岳に計画された南欧風の巨大な宿泊施設「王子アルカディアリゾートホテル」は、1993年に建物は着工してしまったが、内装は未完のままとなった。1998年には、教育施設に転用する案もあったが実現することなく<sup>99</sup>、現在廃墟と化している。

### 3-2. ポルトガルとの姉妹都市提携から生まれたポルトガル風の建物の施設

1543年の種子島での鉄砲伝来から、日本との歴史的な交流関係が最も長いのはポルトガルである。スペイン人ザビエルの布教活動はポルトガル王の命によるものであったし、「南蛮貿易」の主たる相手もポルトガルだった。日本とポルトガルで最初に結ばれた姉妹都市は1969年の徳島市とレイリア Leiria で<sup>100</sup>、1972年のスペインのトレドと奈良の姉妹都市締結よりも早かった。

その後1978年には、ポルトガルとの姉妹都市が二組誕生した。大分市とアヴェイロ Aveiro と、長崎市とポルト Porto である。最初の姉妹都市だった徳島市内にポルトガル風の建物は建てられていないが<sup>100</sup>、長崎と大分市内では、



1990年代にポルトガル風をコンセプトにした建物の計画が、幾つか起こっている<sup>102)</sup>。

1991年、大分市西部、大分港の公共埠頭があった土地に「ポルトガル村」をつくる計画があった。内容は、ポルトガル料理を出す水上レストラン、ポルトガル雑貨店、海洋博物館、南蛮船の復元などであったが<sup>103)</sup>、バブル崩壊のため実現しなかった。その代わりに、大分市内には、ポルトガル語で「pôr do sol (夕暮れ)」と名付けられた「ポルト・ソール商店街 (現・ふないポルトソール商店街)」が竹町にできている。ただ、日葡交流450周年にあたる1993年の時点では、ポルト・ソール商店街では、「ポルトガル風の街並みを演出<sup>104)</sup>」する予定だったが、実現したのは数軒のヨーロッパ調の建物だけで、ポルトガルの雰囲気を堪能できる街並みにはならなかった。

一方1997年、長崎市に開業した「ホテルモントレ長崎」は<sup>105)</sup>、オレンジの瓦屋根にヨーロッパ風の外観で、ポルトガルの民家のような中庭もあり、内外装にポルトガル製のアズレージョタイルが貼られた。館内の美術調度品も本物のアンティークが使用されており、ポルトガルの雰囲気が存分に味わえる建物だ。翌1998年、長崎市では、「ポルトガルの下町の街並み」をコンセプトにした築町市場<sup>つきまち</sup>の商業施設「メルカつきまち」が、第三セクターで実現した。エントランス周りに有田焼で再現したアズレージョタイルを貼り、ファサードデザインもポルトガル風だったが<sup>106)</sup>、2018年に外壁が剥離し、修繕後は煉瓦や装飾部を撤去して、シンプルな塗装で簡素化されたため、現在はかつてのポルトガル風の外観デザインは失われてしまっている。

なお、バブルのさなかの1990年、熱海市とカスカイス Cascais が姉妹都市になったが、ポルトガル風の建物は特段つくられていない。熱海はすでに1976年、イタリアの温暖な海浜リゾート地、サンレモ San Remo 市と姉妹都市になっており、1982年に海岸沿いの公園が整備され、サンレモ公園と命名されている。

1990年には、銚子電鉄の各駅が、かつて埼玉県所沢市にあった「ユネスコ村」風に、駅ごとに世界各国の建物のようにする改築するプロジェクトを機に、犬吠駅が、犬吠埼が日本の東の端にあることから、西の端にあるポルトガルのロカ岬 Cabo da Roca にちなんで、白壁とオレンジ瓦のポルトガル風の駅舎となった。ポルトガル産のタイルがホームの壁面の随所に貼られ、駅名板もタイル張りでアズレージョ風にデザインされた (図15:左)。建設当初は、正面ファサード中央上部は、青い装飾タイルが敷き詰められていたが、徐々に剥離・落下してしまっただため、2013年には撤去されてベージュの外壁パネルに差し替えられている (図15:右)。



図15：銚子電鉄の犬吠駅の塀に貼られたポルトガルのアズレージョタイル (2022年6月、筆者撮影) (左); 銚子電鉄の犬吠駅舎のファサード中央に貼られていたタイルは現在撤去された (2022年6月、筆者撮影) (右)

1993年は、鉄砲伝来の地である種子島 (西之表市) とヴィラ・ド・ビスポ Vila do Bispo が姉妹都市提携を結んだため、1995年には種子島の門倉崎に、本格的なテーマパーク「ポルトガル村」の計画が起こっていた。これは岩崎産業 (鹿児島市) が、ポルトガル政府の協力のもと、ハウステンボスに匹敵する規模の「ポルトガル風の街並み」とポルトガルの帆船を再現し、「オリーブを中心とする南欧風植物園」も併設する予定であったが<sup>107)</sup>、実現には至らなかった。

また、1994年の関西国際空港の開港で、その対岸 (大阪府泉佐野市) に、魚介レストラン・市場・ヨットハーバー

等のある「泉佐野フィッシュマンズ・ワールド」(1995年から着工し、2001年までに開業する予定だった)では、「ポルトガルの漁港」をイメージした南欧風の街並みを再現する案があったが、実現していない<sup>(96)</sup>。

その後のポルトガルとの姉妹都市関係は、大村市とシントラ Sintra (1997年)、人吉市とアブランテス Abrantes (2009年)、国際友好都市は逗子市とナザレ Nasaré (2004年)があるが、バブル期の流行を引きずることなく、ポルトガル風の公共施設は建設されなかった。

### 3-3. 南仏との姉妹都市提携から生まれた南仏風の建物の施設

日仏間の姉妹関係は、1958年の京都とパリで始まったが、現在は2017年の縁組を最後に、海外領土のニューカレドニアも含めて全54組を数えている。本稿のテーマである南欧らしさに合った南フランスとの姉妹関係を考えるにあたって、プロヴァンスの海浜町とオクシタニー地方の町との姉妹関係を中心に抽出すると<sup>(97)</sup>、神戸市とマルセイユ Marseille (1961年)、鎌倉市とニース Nice (1966年)、静岡市とカンヌ Cannes (1991年)、和歌山県とピレネー・オリアンタル県(オクシタニー州) (1993年)、京都府とオクシタニー州 (2015年)がある<sup>(98)</sup>。

神戸や鎌倉では姉妹都市提携が1960年代とかなり早かったため、バブル時代に流行したような南仏風の建物が姉妹都市であるからという理由で建てられることはなかった。静岡市は、南仏プロヴァンスの代表的な海浜リゾート地カンヌとバブル期に姉妹都市になったこともあり、JR静岡駅南口に1997年に開業したホテル小田急(現・ホテルグランヒルズ静岡)が、計画当初、館内の内装を南仏風にする案もでていた<sup>(99)</sup>。

以下は、南仏との姉妹都市とは無関係だが、日本で行われた南仏風の代表的な施設を挙げておく。いずれもバブル期前後に集中している。ちょうど当時は、ピーター・メイル Peter Mayle の『南仏プロヴァンスの12か月 *A Year in Provence*』(1989年)が、1993年に邦訳され日本でもベストセラーになったことや、ボジョレー・ヌーボーのブームの到来もあり、南仏への関心が高まっていた。

東京の多摩ニュータウンでは、1990年に、フランス語で「美しい丘 ベルコリーヌ belle colline」と命名された南欧の山岳都市をイメージした茶色い瓦屋根で統一された集合住宅群「ベルコリーヌ南大沢」ができた<sup>(100)</sup>。さらに2000年には、京王線南大沢駅近くに三井不動産グループによってアウトレットモール「ラ・フェット多摩南大沢」が開業した。その名前にフランス語の「祝祭 ラ・フェット la fête」が使われているのは、南大沢を南仏プロヴァンスに擬えて開発されたためである。オレンジ瓦に、淡い暖色系の外壁、古代の水道橋の遺跡の断片のような飾りもあり、近隣の首都大学東京の校舎やマンションも南欧風をイメージしたデザインの建物で、このエリア一帯が南欧風に整備されたのだ<sup>(101)</sup>。2007年に拡張されたさいも、「これまでの南仏プロヴァンス風の町並みに、『プチホテルの中庭が誕生した』というイメージ」でつくられたという<sup>(102)</sup>。

南仏ゆかりの作家サン＝テグジュペリ Antoine de Saint-Exupéry (1900-1944)の生誕100周年にあたる1999年には、彼の代表作『星の王子さま』のテーマパーク「星の王子さまミュージアム」が、箱根仙石原の小田急箱根ハイランドホテルの元テニスコートの敷地内に建設された<sup>(103)</sup>。ここではサン＝テグジュペリの生誕地である1930年代のリヨン Lyon、パリ、プロヴァンスをイメージした町並みや、リヨンの生家や幼年期に過ごしたサン＝モーリス・ド・レマンヌ Château de Saint-Maurice-de-Rémens 城が再現されたのだが、2023年3月にその営業を終える。サン＝テグジュペリの生誕110周年にあたる2009年にも、高速道路の関越道上り線の寄居のサービスエリアが、『星の王子さま』をコンセプトに、南仏プロヴァンスの町並み風にデザインされていたが、2021年に解体されてしまった<sup>(104)</sup>。

## 4. おわりに

以上、戦前のスパニッシュ様式建築の流行から、2000年代初めまでにわたる日本の南欧風の建物の流行の変遷を概観した。南欧風らしさの代表格ともいえるスペイン風の事例が極めて多かったが、戦前のはアメリカのスパニッシュの模倣であり、戦後から1980年代のものは、パステル調ないしは白い壁と暖色の洋瓦だけでも「スペイン風」や「南欧風」と称することが許されていた施設がほとんどであった。しかしバブル期を通じて、自治体の海外視察が盛んとなり、日本人にとって海外旅行が身近になると、南欧含めて海外との姉妹都市提携も活発となり、現地南

欧諸国の本物の民家や建築に直に接する機会が増え、スペイン風・南欧風の模倣が、アメリカ経由でなくなり、精巧な再現・レプリカのようなものから、着想源として自由にデザインするものまで事例がさらに豊富となった。スパニッシュ風の建物の事例も戦前までは、住宅や飲食店など小規模なものか、一部のホテル建築を中心としていたが、戦後はマンションや大規模ホテル、バブル期はリゾート施設、テーマパーク、商業施設、2000年代は、ショッピングモールやアウトレット、今回は触れなかったが結婚式場施設へも広がり、未だに南欧の建物を模倣することに偏向した嗜好は終わっていない。

1980～90年代、海外の町並みを模したテーマパークやホテル・商業施設が日本各地で急増するも、バブル崩壊によってその多くが破綻したり、人気低迷したりしたが、近年はドラマ・映画のロケ地に選ばれたり、SNSで写真映えする関心から、撮影スポット・観光地として息を吹き返している面もある。さらにコロナ禍中に海外渡航が制限され、緩和・解除後は円安とインフレで旅費が高騰して欧米旅行に手が届きにくくなると、国内にいながら外国気分になれる場所として、海外の建物や町並みを模した商業施設が見直されている。しかしながら、建設年の途切れ方や建設事例の減少、解体事例の増加を顧みれば、南欧らしさを代表するスペイン風、ポルトガル風、南仏プロヴァンス風の建物への偏向は風前の灯だ。その兆しは、2000年代に南欧風の町並みで流行していたアウトレットモールのデザインコンセプトの選定が、再び戦前のときのようにアメリカ西海岸経由のスパニッシュ嗜好へ回帰している事例からも見てとれる。佐賀県鳥栖市の「鳥栖プレミアムアウトレット」(2004年)は、アメリカ西海岸サンタバーバラ Santa Barbara をイメージしたデザインで、神戸市北区の「神戸三田プレミアム・アウトレット」(2007年)は、ロサンゼルス市郊外の高級住宅地パサディナ Pasadena をモデルとし、茨城県稲敷郡阿見町の「あみプレミアムアウトレット」(2009年)は、アメリカ西海岸をイメージしたコンセプトとなっている。さらに近年は、かつてアンダルシア風ないしは南欧風で町づくりを行っていた房総半島で、袖ヶ浦の海岸にそびえる高い椰子の並木通りが「千葉フォルニア」と呼ばれて、アメリカ西海岸の雰囲気味わえる写真映えスポットとしてその名が知られるようになっており、もはやかつて房総で一世を風靡していたアンダルシア風・南欧風のコンセプトはここでは忘れ去られているようだ<sup>10)</sup>。

バブル時代に興隆したスペイン・南欧風の建物や商業施設も、今となっては文化財登録の条件となる築50年の経過に近づきつつあり、解体の危機を免れさえすれば、そろそろ過去の遺産の仲間入りをする時期への準備に入るのはないだろうか。

## 【謝辞】

本研究は、2022年度跡見学園女子大学特別研究助成費を受けて実施された研究課題の一部である。ここに記して心より謝意を表します。

## 〈注〉

- (1) バブル期以降に日本で派生したイタリアをテーマにした商業施設についての概要は、拙稿 Ewa Kawamura (2018). *L'italianizzazione del Giappone contemporaneo. Quartieri, centri commerciali e parchi a tema ispirati all'architettura e alle città italiane*, La Città Altra, Federico II University Press, Napoli, pp. 1075-1084 を参照。
- (2) 戦前の日本で普及したスパニッシュ様式建築についての研究は、丸山雅子 (1993) 「日本近代におけるスパニッシュ建築の成立と展開に関する研究 その1」『日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東)』1993年9月, pp. 1481-1482; 丸山雅子 (1994) 「日本近代におけるスパニッシュ建築の成立と展開に関する研究 その2」『日本建築学会大会学術講演梗概集 (東海)』1994年9月, pp. 1425-1426 に詳しい。滋賀重列の経歴については、内田青蔵 (1998) 「昭和6年竣工の建築家滋賀重列の自邸について」『日本建築学会学術講演梗概集 (九州)』1998年, pp. 381-382 を参照。
- (3) ガーディナーが1927年に設計した東京・六本木のスペイン大使館の建物は、オレンジ色のスパニッシュ瓦に白壁であるため、スパニッシュ様式と言われるが、ファサードにイタリア由来のヴェネツィア窓 Serliana が使われていて、イタリア建築の要素も加味されている。なお同じくガーディナーが、1919年に京都の実業家の迎賓館として設計した「長楽館」もイタリア風ルネッサンス様式のファサードとなっている。
- (4) モーガンは、藤沢の自邸 (1931年) や、横浜在住の外国人の邸宅であるラフィン邸 (1926年) とベリック・ホール (1930年)、横浜のホテル・ニューグランドの屋上部分の増築部分 (1932年) を、スパニッシュ様式で設計した。一方、同モーガンが設計した根岸の競馬場はイタリア風の意匠となっている。モーガンのスパニッシュ様式建築については、田中厚子; 水沼淑子 (2001) 「建築家 Jay H. Morgan の事跡と自邸について」『2001年度日本建築学会関東支部研究報告書』, pp. 649-652; 田中厚子; 水沼淑子 (2003) 「Jay H. Morgan の住宅作品について」『2003年度日本建築学会関東支部研究報告書』, pp. 417-420; 水沼淑子 (2009) 『ジェイ・H・モーガン—アメリカと日本を生きた建築家』 関東学院大学出版会を参照。



- (5) レーモンドのスパニッシュ様式建築には大阪府寝屋川市の聖母学院校舎(1932年)や、藤沢カントリー倶楽部クラブハウス(1932年)があり、住宅の作例では、スパニッシュ建築の影響を受けたパティオをよく取り入れている。水沼淑子(2006)「アントニン・レーモンド設計の旧藤沢カントリー倶楽部クラブハウスについて」『日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』2006年9月、pp.533-534；三沢浩(1998)『アントニン・レーモンドの建築』鹿島出版会
- (6) ヴォーリズ設計のスパニッシュ様式建築の代表的な作例には、兵庫県西宮市の関西学院大学(1926-56年)、兵庫県西宮市の聖和大学4号館(現・関西学院大学教育学部)(1932年)、神戸女学院大学(1933年)、滋賀大学陵水会館(1938年)があるが、住宅建築でスパニッシュ様式を採用したものも、京都にある駒井家住宅(1927年)ほか少なくない。京都の中華料理店「東華菜館」(1926年)に至っては、その玄関装飾(ポータル)の一致から、アメリカの建築雑誌「The Architectural Forum」の1921年9月号に掲載された建物(William Henry Weeks 設計の Californian Healdsburg High School Building) がモデルであることが判明した。神谷悠実；富岡義人(2011)「W. M. ヴォーリズ建築事務所所蔵のスクラップブック「SPANISH」の内容とその設計への適用に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』76巻665号、pp.1301-1309
- (7) 松ノ井覚治のスパニッシュ様式の作例には、東京都大田区の数江家住宅(1939年)、静岡の旧マッケンジー邸(1940年)、熱海の蜂須賀正氏侯爵別邸(1939年、1986年解体)、東洋英和女学院(1939年、1993年解体、2003年復元)があるが、松井のニューヨーク時代、ボザールの設計競技の課題で提出したスパニッシュ様式のホテルの設計案(1923年)が、2等入選を果たしていた(三宅, 2014, 640)。
- (8) 静岡市役所は、フロリダ州フォートマイヤーズの市営棧橋 Municipal Pleasure Pier(1927年、現存せず)の意匠と似た部分が認められる。伊藤晴康氏は、豊橋市公会堂とテキサス州サンアントニオのオーデトリウム(San Antonio Municipal Auditorium, 1926年)の外観意匠が酷似していることを指摘している。伊藤晴康(2002)「豊橋市公会堂の意匠におけるスパニッシュ・コロニアルバイバルの影響について」『豊橋創造大学短期大学部 研究紀要』第19号、pp.1-12
- (9) ただし、この建物の屋根形状は、20世紀初頭のドイツの住宅建築で流行していた田舎家風の兜造りに似た入母屋と半切妻が混合した屋根のあるデザインのようにみえる。
- (10) 1921年に欧米視察を経験している木子七郎設計のスパニッシュ建築に、大阪の自邸(1913年)、東京・九段下の山口萬吉邸(1927年)、西宮の新田長次郎・利國邸(現・松山大学温山記念会館)(1928年)、東京・広尾の新田愛祐邸(1929年)がある(武知；波多, 2013, 851-852)。
- (11) 安井武雄はスパニッシュ様式で、大阪倶楽部(1924年)や、神戸・御影にある大林組社長の大林義雄邸(1932年)を設計した。
- (12) 渡辺節は、スパニッシュ様式で大阪・岸和田にある岸和田紡績の創業者一族が作った倶楽部「自泉会館」(1932年)や、神戸の乾汽船の創業者一族の邸宅「旧・乾邸」(1936年)を設計した。
- (13) 松田軍平は1921年にコーネル大学に留学し、スパニッシュ様式で福岡県久留米市の石橋徳次郎邸(現・石橋迎賓館)(1933年)、伊豆の三井高修別邸(1934年)を設計した。
- (14) 森田慶一は、1934-36年のフランス留学後、京都帝国大学で教鞭をとるようになり、同大学が創立25周年を記念して建てた学友会館(1925年)を、オレンジ瓦・白壁・アーチ連窓のあるスパニッシュ・ミッション様式で設計した。また同大には、スペインの僧院をモデルにしたスパニッシュ・ロマネスク様式の東方文化学院(現・東洋文化研究所)もあり、設計は武田五一(1872-1938)と東畑謙三(1902-1998)による。京都大学・東アジア人文情報学センター「建物の歴史」<http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/introduction/building/>(2022年11月3日閲覧)
- (15) 山田馨(かおる)(1890-1970)の設計で(藤谷, 1996, 60)、1978年に解体された(富田, 2003, 227)。
- (16) 創業時は「逗子ホテル」という屋号だったが、のち、「なぎさホテル」と改名し、1989年に解体された(逗子市, 1995, 469)。
- (17) 高野組建設部(高野建設)の設計により、のち「大島小涌園」となった(富田, 2012, 38)。
- (18) 高橋貞太郎(1892-1970)設計の川奈ホテルでは、ロビーラウンジやレストラン部分等の内装でも、スパニッシュ様式が使われており、最寄りの伊東駅(1938年)もスペイン風を意識した意匠となっている。
- (19) 1989年に閉業し、2001年に解体された(国際興業, 1990, 142)。
- (20) 箱根ホテルは1992年の再建・新規オープンにあたって、スパニッシュ様式の建物は解体された。富士屋ホテルズ&リゾート「ホテルヒストリー」<https://www.fujiyahotel.co.jp/history/>(2022年10月26日閲覧)
- (21) 清水建設の小笹徳蔵(1890-1971)による設計で、1961年の増築時に大幅に改築され、1991年解体された。清水建設「京都ホテル」[https://www.shimz.co.jp/works/jp\\_com\\_192802\\_kyotohotel.html](https://www.shimz.co.jp/works/jp_com_192802_kyotohotel.html)(2022年10月26日閲覧)。
- (22) 藤森照信「日本近代建築におけるアメリカの影響に関する研究」1998-99年度科研費基盤研究(C)、<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-10650628/>(2022年10月24日閲覧)
- (23) 中嶋直子；内田青蔵(2006)「わが国戦前期の都市独立住宅における外部意匠の変容過程に関する一考察：『あめりか屋』の住宅作品の外部意匠を中心に」『日本建築学会計画系論文集 第599号』、pp.181-188
- (24) 例えば、大野三行(1922)「スペイン風の住家」『バungalow式明快な中流住宅』洪洋社、pp.74-75；武田五一(1926)「西班牙ミッション式」『住宅建築要義』文献書院、pp.134-135；主婦之友社編輯部編(1936)「近代的な西班牙風の模範小住宅」『模範住宅二十九種便利な家の新築集』主婦之友社、pp.36-39があり、関西信託株式会社調査課(1941)『住宅設計百案』大阪市、pp.10-13では、4件のスパニッシュ様式住宅が掲載されているが、「西班牙風の家」「スパニッシュ・ミッション風の家」「スパニッシュ式の住宅」「大きい暖炉のある家」と同じ様式でも、それぞれ言葉を変えて紹介された。なお、大野貞三(1926)『近代住宅の様式』東亜堂、pp.56-61の場合は、住宅建築の書籍ではよくスパニッシュ様式が紹介されたなか、珍しく、イタリア風の住宅も2件紹介している。
- (25) 東海銀行の保養施設として使用するために、1980年代に箱根・強羅に移築され、1998年より現・美術館として使用されている。箱

- 根マイセンアンティーク美術館「建物について」<http://www.hakone-meissen.com/museum.html> (2022年10月26日閲覧)
- 26 鈴木楨次の設計で名古屋の八事・南山にあったが、現在は豊田市のトヨタ鞍ヶ池記念館に移築されている。
- 27 「スパニッシュ・コロンアル式は又スパニッシュ・ミッション式、或いは単ににミッション式とも呼ばれ、(中略) 我国にも一時流行を来して、住宅から一般建築、殊に料理店や喫茶店に盛んに用いられたのであった」(須藤, 1950, 44)。
- 28 山岸一平(武尾工務店)の設計による(彰国社, 1958, 64-71)。
- 29 初代店長の山寺弥之助によるデザインを踏襲した。名曲喫茶ライオン「名曲喫茶ライオンの歴史」<http://lion.main.jp/info/infomation.htm> (2022年10月26日閲覧)
- 30 中條精一郎(1868-1936)と曾禰達蔵(1853-1937)による設計である。
- 31 本館は、1972年に文豪の川端康成が自殺した建物である。東急リパブル「逗子マリーナ」<https://www.livable.co.jp/mansion/library/M000000116963/> (2022年11月6日閲覧)
- 32 ゴルフ場のクラブハウスの建物を、オレンジ瓦と白壁で、南欧風あるいはスペイン風にデザインすることは、バブル期に流行し、三重県の芸濃セントラルのゴルフクラブゲストハウス(1991年)、福島県いわき市の「小名浜オーシャンホテル&ゴルフクラブ」(1992年)、愛媛県北条市のサンセットヒルズカントリークラブ(1993年)などの事例が挙げられる。
- 33 渋谷区「通りの名」<https://www.city.shibuya.tokyo.jp/bunka/spot/meisho/street.html> (2022年11月4日閲覧)
- 34 「島根県経済連、ワイン新工場が完成し出雲路の観光名所にと期待。』『日本経済新聞』中国地方版、1986年3月20日、p. 11
- 35 「島根ワイナリー—南欧風、出雲観光の定番に(発信この企業あの団体)』『日本経済新聞』広島地方版、1994年5月24日、p. 23
- 36 「房総リゾート半島胎動 ひしめく巨大開発 千葉」『朝日新聞』千葉県版朝刊、1989年1月1日
- 37 「外房は地中海風高級別荘地 房総リゾート開発構想発表 千葉」『朝日新聞』千葉朝刊、1988年8月4日
- 38 「飛鳥建設グループ、リゾート事業を強化、館山に南欧風ホテル—伊東に仏風宿泊施設。』『日経流通新聞』1988年5月17日、p. 5
- 39 「目指せ地中海リゾート、館山市の街並み景観要綱—白壁にオレンジ屋根指導。』『日本経済新聞』1991年3月1日、p. 5
- 40 同上。
- 41 2016年に「館山リゾートホテル」と改名された。
- 42 田邊博司(1988)「ホテル・アクション館山」『建築文化』9月号、pp. 102-108.
- 43 「日本・サンランド、ホテルアクション館山—投資もレジャーも(先端リゾート情報)』『日経産業新聞』1988年1月16日、p. 3
- 44 当時、会津高原は、チロル風のデザインでホテル・リゾートを開発していた地域であった。「スペイン風ホテル登場、会津高原たかつえ—日本サン・ランド。』『日本経済新聞』東北版、1990年3月14日、p. 24。「ホテルアクション会津高原」のオレンジの瓦屋根はのち緑色のスレートに拭き替えられ、今は廃墟となっている。バブル期に、スペイン風あるいは南欧風をモチーフに、オレンジ瓦と白壁で建て、現在廃墟となった施設には他にも、香川県小豆島の「リゾートホテルアクア小豆島」(1988年)、山口県萩市の椿東孤島の「萩女子短期大学」の校舎(1989年)、山口県柳井市の「コストリゾート・ゴルフ&スパ」(1998年)がある。
- 45 「日本サン・ランド社長赤塩裕氏—ホテル会員に配当(風雲トップ)』『日本経済新聞』朝刊、1995年5月3日、p. 13. こちらはオレンジ瓦と白壁でも、南仏のヴィラ風にも見える建物である。2014年にリブマックスリゾートの傘下となり、現在は「リブマックスリゾート軽井沢フォレスト」として営業している。
- 46 「JR 東日本千葉支社、館山駅を橋上化、南欧風の外観に。』『日本経済新聞』千葉版、1997年12月3日、p. 39
- 47 「地中海風ホテルへ 元国民宿舎の鳴海荘改築、近く着工 勝浦／千葉」『朝日新聞』千葉朝刊、1993年7月27日。現在は解体され、更地のまま跡地が公園となっている。
- 48 「千葉県内観光地の3駅改装、来月末、まず安房鴨川駅。』『日本経済新聞』千葉版、2006年2月1日、p. 39
- 49 「長崎・伊王島、通年リゾート化へスポーツ施設整備。』『日本経済新聞』九州版、1993年1月20日、p. 14
- 50 「伊王島リゾート、ホール新設宿泊も増強。』『日経産業新聞』1990年2月5日、p. 21
- 51 「伊王島スポーツ、『ルネサンス長崎』にスペイン風コテージ。』『日経産業新聞』1991年2月25日、p. 18
- 52 「ホテル『ルネサンス長崎・伊王島』ラテン色さらに強く—10月改称、人材スカウト。』『日本経済新聞』九州版、2000年8月26日、p. 14
- 53 「鳴門のマジリリゾート、国際高級ホテル網に加盟—サービス強化、顧客増を図る。』『日本経済新聞』、四国版、1993年9月7日、p. 12
- 54 兵庫県立津名高等学校は、2019年に「淡路島百景」に選出された。
- 55 「地中海風で売ります 新島ショッピングモール 兵庫・津名町」、『朝日新聞』、兵庫県版朝刊、1992年1月24日；「初日の客は4万人！ 津名町の新商業ゾーン、15日オープン／兵庫」、『朝日新聞』、兵庫県版朝刊、1993年10月16日
- 56 「製菓の浜幸、高知・夜須町に建設—菓子工場併設滞在型リゾート、94年完成予定。』『日本経済新聞』四国版、1992年12月17日、p. 12
- 57 「高知の浜幸、来年開業、異色リゾート計画—地中海風、菓子工場も。』『日経流通新聞』1993年1月7日、p. 5
- 58 廃墟探索地図「シャトー三宝」<https://haikyo.info/s/9427.html> (2022年11月7日閲覧)
- 59 「アサヒ恒産と大成建設、南欧風リゾートホテル—沖縄・恩納村に建設へ。』『日経産業新聞』1992年9月8日、p. 20
- 60 名護市・部瀬名岬にある、スペイン風の屋根瓦が印象的なホテル「ザ・ブセナテラス」(1997年)は、内装に沖縄でよくみられる白いブロック壁で模様をつくる間仕切りが使用されており、沖縄建築の要素が強く、沖縄でのバブル期以降のスペイン瓦を使用した建築の流行は、本土のものとは規模も様相も異なったものである。
- 61 アクア・パラダイス・パティオ「施設案内：深谷グリーンパークとは」<https://patio.or.jp/about.html> (2022年10月19日閲覧)。
- 62 「ゴミ焼却熱利用し温水プール 深谷に「パティオ」オープン／埼玉」『朝日新聞』埼玉朝刊、1996年7月4日

- 63 「施設相次ぎ開幕式典 明石海峡大橋、きょう開通／兵庫」『朝日新聞』兵庫県版朝刊、1998年4月5日
- 64 「海望む丘、南欧風のしゃれた校舎 淡路景観園芸学校が完成／兵庫」、『朝日新聞』、兵庫県版朝刊、1999年2月11日
- 65 「再生を目指して三井三池閉山から1年(上)“核”探し—商業施設地元とどう共存。』『日本経済新聞』九州版、1998年3月25日、p. 14
- 66 「九州の行楽施設、GW期間中の人出、近場志向映し多めの予想。」『日本経済新聞』九州地方版、1998年4月25日、p. 14
- 67 「観光の街『セキアヒルズ』が県境に完成 熊本・福岡【西部】」『朝日新聞』朝刊、1998年4月18日、p. 1.
- 68 「横浜・新本牧—国際色豊かに街づくり、美観重視(大規模開発を点検する)」『日経産業新聞』1989年5月19日、p. 23
- 69 「三井不動産、神戸のアウトレットモールの名称決定。」『日経流通新聞』1999年5月13日、p. 8
- 70 「南欧の田舎イメージ、商業施設の出足好調—都城、商店街有志が運営。」『日経流通新聞』1999年6月24日、p. 23
- 71 「箕面マーケットパークヴィソラ(大阪・箕面市)南欧の街並みイメージ(みせどころ)」『日経MJ(流通新聞)』2003年11月1日、p. 10
- 72 「大洗にアウトレットモール 来春開業、衣料や雑貨など70店舗=茨城」『読売新聞』2005年6月24日
- 73 堀川勝元「(週刊まちぶら あなたの街から) 大津市・青山地区 住民が醸す協力の輪／滋賀県」『朝日新聞』滋賀県版朝刊、2009年9月6日、p. 27
- 74 「江戸や欧州風…テーマパーク型PA 続々ドライブ休憩、心の交差点(お出かけナビ)」『日本経済新聞』夕刊、2014年3月8日、p. 4
- 75 2003年には、ナバラ州と山口県は州・県単位でも姉妹関係を締結した。
- 76 現在の建物は、1998年、イタリア人神父コスタンティーノ・ルッジェリ Costantino Ruggeri (1924-2007) と建築家ルイーダ・レオーニ Luigi Leoni によるモダンなデザインで再建されたものである。その近くに1996年に開業した小規模なホテル「ラ・フランチェスカ」(山口市龜山町7-1)は、聖堂近くという環境に合わせてスペイン風の外観であったが、2019年に閉業した。
- 77 斎藤仁志「プライムリゾートクラブ賢島—近鉄のグループ力試す(追跡リゾート開発)」『日経産業新聞』1992年2月7日、p. 19
- 78 「三重・磯部町にスペインの風景を再現(列島縦横)」『朝日新聞』朝刊、1990年12月20日、p. 29
- 79 現在は敷地内のカフェ「Cafe Amigo」の名前に受け継がれている。志摩地中海村「お食事のご案内」<https://www.puebloamigo.jp/meal/> (2022年11月6日閲覧)
- 80 「志摩地中海村」の設立や設計にまつわる本稿の情報の多くは、当時の社内資料・議事録を提供下さった、代表取締役社長大西晶氏をはじめ支配人の坂浩二氏の篤いご厚意によるもので、この場をお借りして心より御礼申し上げます。
- 81 エメラルド海岸を象徴するこのホテルは、フランス人建築家ジャック・クエル Jacques Couelle (1902-1996) の想像力で1960年代にデザインされた地中海の架空の村のようなデザインで、他のエメラルド海岸の有名ホテル Hotel Romazzino (Michele Busiri Vici 設計) や Hotel Pitrezza (Luigi Vetti 設計) も、伝統的な古民家の郷土様式のようにみえるが、実際は1960年代に建築されたものである (Dessi, 2016, 47)
- 82 中川竹美「国内で浸る地中海の情緒 イタリア・スペイン…一歩入れば異国の街並み 本場の家具使う滞在型リゾート」『日本経済新聞』夕刊、2015年5月16日、p. 4
- 83 「『志摩地中海村』が拡張、婚礼・宿泊新增設、サミット後にらむ。」『日経MJ(流通新聞)』2016年2月3日、p. 4
- 84 志摩地中海村「施設案内」<https://www.puebloamigo.jp/facilities/> (2022年10月28日閲覧)
- 85 社員寮(現・ホテル「シーズンイン・アミーゴス」)もスペイン風を意識した建物となっている。
- 86 1996年のフィエスタ・デ・ガリシア開催を記念して、ガリシア州から寄贈されたものである。
- 87 あとの3箇所は、現地アルタミラの博物館と、マドリードの国立考古学博物館、独ミュンヘンのドイツ博物館である。
- 88 「町並みに南欧の風 駅や銀行、駐在所…磯部町に建築物続々／三重」『朝日新聞』三重版朝刊、1997年6月13日
- 89 UBE 宇部市 未来を彫刻するまち「交流の経緯と姉妹都市提携調印式(スペイン カステジョ・デ・ラ・プラーナ市)」<https://www.city.ube.yamaguchi.jp/shisei/keikaku/kokusai/1007220/1007233/1007235.html> (2023年2月9日閲覧)
- 90 山口宇部経済新聞「宇部の結婚式場『風のみえる丘フェリス』が10周年—記念イベントも」2013年1月30日配信、<https://yamaguchi.keizai.biz/headline/1643/> (2022年11月3日閲覧)
- 91 「くれフェニックス計画、16の遊戯施設を設置—中四国最大規模に。」『日本経済新聞』中国地方版、1989年8月18日、p. 35
- 92 一般財団法人自治体国際化協会「姉妹提携データ：スペイン」<http://www.clair.or.jp/j/exchange/shimai/countries/detail/53> (2022年10月18日閲覧)
- 93 会期中にはアクセスの便を図った関西国際空港も開港しており、設計にはイタリアの著名な建築家レンゾ・ピアノ Renzo Piano が起用された。
- 94 「ポルトヨーロッパ」のオフィシャルサイトには、イタリアの「FINO」という町をモチーフにしていると書いてあるが、イタリアにフィーノという町は存在せず、明らかにポルトフィーノ Portofino の誤記である。それにしてもポルトフィーノとは異なる、イタリアの丘陵内陸地の中世の村のような雰囲気、漁村であるポルトフィーノとも似ていない。またこのイタリア風エリアの階段の路地(ヴィエッタ)の名前を、「カプリ」としてあるが、カプリの町並みとはさらに乖離している。ポルト・ヨーロッパ「パークガイド」<https://www.marinacity.com/porto/guidecat/photospot/> (2022年11月6日閲覧)
- 95 「和歌山の『ポルトヨーロッパ』、3月から入園無料に、『黒潮市場』は一部改装、回遊性高め集客狙う。」『日本経済新聞』近畿地方版、2016年1月29日、p. 9
- 96 「『岡山スペイン村』に県・玉野市が出資、事業会社、第三セクに。」『日本経済新聞』中国版、1991年7月25日、p. 35
- 97 「岡山・玉野、スペイン村、事業着手、3度目の延期—資金難、規模縮小も。」『日経流通新聞』1994年3月15日、p. 17
- 98 「玉野の『商業集積』始動、玉野街づくり株式会社、月内にも3セクに。」『日本経済新聞』中国地方版、1991年11月15日、p. 35



- (99) 「岡山・玉野で環境庁、放置ホテル購入、環境研修施設に。」『日本経済新聞』広島版、1998年10月31日、p. 23
- (100) 在ポルトガル日本大使館「日本・ポルトガル間姉妹都市」[https://www.pt.emb-japan.go.jp/itpr\\_ja/00\\_000161.html](https://www.pt.emb-japan.go.jp/itpr_ja/00_000161.html) (2022年10月18日閲覧)
- (101) 2004年、徳島市では、徳島に住んでいたポルトガル人外交官で作家のヴェンセスラウ・デ・モラエス Wenceslau de Morais (1854-1929) の生誕150周年を記念して、モラエスの銅像が建立されている。
- (102) もっと早い時期の1987年、大分市ではないが、大分県杵築(きつき)市・住吉浜にある宿泊施設「住吉浜リゾートパーク」(1974年創業)が、10年かけて「ポルトガル風」に改築し、「ポルトガル村」を構築する計画を立てていた。社長の工藤弘太郎氏と設計担当者が、ポルトガルや地中海の町々を視察までしたが、ポルトガル村は実現することなく、白壁の2階建ての建物の切妻屋根にオレンジ色の瓦を使用するに留まっている。「住吉浜リゾートパーク、10年かけポルトガル風に、住吉浜開発。」『日本経済新聞』九州版、1987年8月9日、p. 13
- (103) 「大分港西部に“ポルトガル村”再開発計画まとまる。」『日経流通新聞』1991年11月7日、p. 19
- (104) 「日本・ポルトガル修好450周年、国際交流の“先駆け”(列島ワイド)」『日本経済新聞』朝刊、1993年10月25日、p. 31
- (105) 「客室123室備える、ホテルモンテ長崎きょう開業。」『日本経済新聞』九州版、1997年4月18日、p. 13
- (106) 「長崎市、十八銀など、長崎『食文化拠点』建設へ3セク設立。」『日本経済新聞』1996年4月4日、九州版、p. 13; ながさき市民生活便利館メルカつきまち「メルカつきまちのコンセプト」<http://www.merca-tsukimachi.jp/concept.html> (2022年11月7日閲覧)
- (107) 「岩崎産業が計画、種子島に『ポルトガル村』一街並み再現、帆船も復元。」『日本経済新聞』九州版、1995年6月13日、p. 14; 「[みなど] 鹿児島・種子島でテーマパーク「ポルトガル村」建設構想」『読売新聞』西部夕刊、1995年6月23日、p. 11.
- (108) 「泉佐野フィッシュマンズ・ワールド、12月に三セク設立—ホテル建設など先送り。」『日本経済新聞』近畿版、1994年5月12日、p. 9; 「泉佐野市の海洋レジャー施設、運営へ3セク設立。」『日経産業新聞』1994年11月11日、p. 19
- (109) オーベルニュ・ロース・アルプ州もヌーベル・アキテーヌ州も南仏エリアであるが、前者はスイス・アルプスへの玄関口、後者はピレネー山脈を含む山岳地帯としての性格もあり、日本人が即座に思い描く典型的な南仏のイメージとはやや趣を異とするので、本論ではプロヴァンス、コルシカとの姉妹都市を挙げるにとどめておく。ただしプロヴァンス・アルプ・コートダジュール州の内陸の山間部であるアルプ・ド・オート・プロヴァンス県内の町との姉妹都市も同様の理由から除外しておく。
- (110) CLAIR Paris (クレア・パリ)「日仏間の姉妹都市一覧表」<https://www.clairparis.org/ja/action-jp/cd2-jp> (2022年10月18日閲覧)。
- (111) 「ホテル小田急が静岡に進出 市内最大宴会場も／静岡」『朝日新聞』静岡県版朝刊、1994年10月18日
- (112) 「我が家は南欧風個性派(メトロポリス新景)」『日本経済新聞』、1991年1月26日、p. 5
- (113) 「ラ・フェット多摩南大沢(八王子市)—南欧風の街で買い物(多摩逍遙そぞろ歩き)」『日本経済新聞』2007年8月24日、p. 15; 日本ショッピングセンター協会(2000)「日本のSC:ラ・フェット多摩南大沢(東京都八王子市)」『ショッピングセンター』11月号、pp. 56-61
- (114) 「きょう拡張オープン、計112店舗に 八王子・南大沢のアウトレットモール」、『朝日新聞』多摩地方版朝刊、2007年12月14日、p. 35
- (115) 「『星の王子さま』箱根に降り立つ、サハルと小田急電鉄が展示施設。」『日経流通新聞』1998年9月29日、p. 19
- (116) 「PAに新風『星の王子さま』県内高速道の休憩施設、『変身』相次ぐ」『朝日新聞』、埼玉県版朝刊、2010年7月3日、p. 28; 高速道路調査会(2010)「『寄居星の王子さまPA』の誕生—SA・PAのイメージの刷新」『高速道路と自動車』9月号、pp. 48-51
- (117) 堤恭太「ここは『千葉フォルニア』ヤシ・青い海…気分はカリフォルニア 袖ヶ浦／千葉県」『朝日新聞』ちば首都圏版朝刊、2017年9月18日、p. 25

## 〈参考文献〉

- アミューズメント産業出版(1994)「MCAのノウハウを結集!!『新しい県の新しい都市』の核として《ポルトヨーロッパ》開業」『アミューズメント産業』8月号、pp. 150-163
- 泉澄一(1981)『堺:中世自由都市』教育社
- 伊藤銀月(1910)『日本風景新論』前川文栄閣
- 伊藤晴康(2002)「豊橋市公会堂の意匠におけるスパニッシュ・コロニアルリバイバルの影響について」『豊橋創造大学短期大学部 研究紀要』第19号、pp. 1-12
- 内田青蔵(1998)「昭和6年竣工の建築家滋賀重列の自邸について」『日本建築学会学術講演梗概集(九州)』1998年、pp. 381-382
- 大野貞三(1926)『近代住宅の様式』東亜堂
- 大野三行(1922)『バンガロー式明快な中流住宅』洪洋社
- 小川益司(1991)「国際リゾート『三重サンベルトゾーン』構想」『情報系地域開発プロジェクト講演集』高度情報化推進協議会、pp. 87-112
- 神谷悠実;富岡義人(2011)「W.M.ヴォーリズ建築事務所所蔵のスクラップブック「SPANISH」の内容とその設計への適用に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』76巻665号、pp. 1301-1309
- 川久保篤志(1992)「地域情報 玉野市のスペイン村計画」『瀬戸内地理』1]6月号、pp. 73-75
- 川島智生(2002)「建築家 古塚正治の経歴と建築活動についての研究」『日本建築学会計画系論文集 第552号』2002年2月、pp. 319-325
- 河村英和(2022)「日本の山岳・高原リゾート地における疑似スイス風シャレー建築と英国風・チロル風ハーフトインバー様式」『跡見学園女子大学 観光コミュニティ研究』第1号、pp. 23-41
- 郷土をよくする会編(1964)『静岡年鑑 1964年版』郷土をよくする会

- 関西信託株式会社調査課（1941）『住宅設計百案』大阪市
- 関東銀行創立20周年記念行事編纂委員会編（1972）『関東銀行20年史』関東銀行
- 建築とまちづくり関西編集委員会（1985）「いま瀬戸内は：瀬戸内に育つ日本のエーゲ海 牛窓町」『建築とまちづくり』8月号、p. 10
- 高速道路調査会（2010）『「寄居 星の王子さま PA」の誕生—SA・PAのイメージの刷新』『高速道路と自動車』9月号、pp. 48-51
- 国際興業株式会社社史編纂室編（1990）『国際興業五十年史』国際興業高木義寛（1993）「スペイン仕様をそのまま用いた本格志向のリゾートハウス」『日経アーキテクチュア』10月号、pp. 186-188
- 佐藤工業（株）建築設計本部設備室（1994）「ヨミタリゾートホテル 日航アリビラ 新建築・新設備」『BE建築設備』11月号、建築設備総合協会、pp. 19-27
- 滋賀重列（1916）「米國住家の様式」『住宅建築』建築世界社、pp. 123-142
- 実業往来社（1971）「南房総・平砂浦グランドホテルを訪ねて」『実業往来』4月号、p. 106
- 主婦之友社編輯部編（1936）『模範住宅二十九種便利な家の新築集』主婦之友社
- 彰国社（1954）『洋風喫茶店（建築写真文庫第1期第4）』、彰国社
- 彰国社（1958）『洋風喫茶店4（建築写真文庫第3期第72）』、彰国社
- 陣内秀信（1992）『東京の空間人類学』筑摩書房
- 逗子市（1995）『逗子市史 別編2：考古・建築・美術・漁業編』逗子市
- 須藤真金（1950）『あめりか住宅史話：あめりか住宅の生い立ち』新住宅社
- 総合交通社（1994）「大型テーマリゾート『志摩スペイン村』の魅力に迫る」『総合交通』1月号、pp. 8-13
- 高橋達男（1967）『電風土記』東京出版センター
- 高橋淳一・出野昭彦（1994）「西海橋コラソンホテル」『建築設備士』26（6）（301）、建築設備技術者協会、pp. 7-14
- 武田五一（1926）「西班牙ミッシン式」『住宅建築要義』文献書院
- 武知重耶；波多野純（2013）「建築家・木子七郎に関する研究—住宅作品及び商業建築におけるスパニッシュ様式の採用について—」『日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）』2013年8月、pp. 851-852
- 館山市建設観光部都市計画課（2019）「館山景観計画（概要版）」千葉県館山市
- 田中厚子；水沼淑子（2001）「建築家 Jay H. Morgan の事跡と自邸について」『2001年度日本建築学会関東支部研究報告書』、pp. 649-652
- 田中厚子；水沼淑子（2003）「Jay H. Morgan の住宅作品について」『2003年度日本建築学会関東支部研究報告書』、pp. 417-420
- 田邊博司（1988）「ホテル・アクシオン館山」『建築文化』9月号、pp. 102-108
- 谷島香奈子・haco（2022）『秀和レジデンス図鑑』トゥーヴァージンズ
- 徳富猪一郎（1924）『烟霞勝遊記上』民友社
- 富田昭次（2003）『ホテルと日本近代』青弓社
- 富田昭次（2012）『ホテル博物誌』青弓社
- 中嶋直子；内田青蔵（2006）「わが国戦前期の都市独立住宅における外部意匠の変容過程に関する一考察：『あめりか屋』の住宅作品の外部意匠を中心に」『日本建築学会計画系論文集 第599号』、pp. 181-188
- 中西久（1994）「志摩スペイン村の施設と運営」『Report leisure』No. 497、レジャー・マーケティング・センター
- 西村伊作（1919）『楽しい住家』、警醒社書店
- 西村伊作（1923）「西班牙風の家」、『明星の家』、文化生活研究会、pp. 47-63
- 日本建築協会（1922）『大正十一年九月住宅改造博覧会出品住宅図集』日本建築協会
- 日本商工会議所広報部編（1993）「造船の街に太陽海岸がやってきた 呉ポートピアランド」『石垣：日本商工会議所のビジネス情報誌』10月号、pp. 30-31
- 日本ショッピングセンター協会（2000）「日本のSC：ラ・フェット多摩南大沢（東京都八王子市）」『ショッピングセンター』11月号、pp. 56-61
- 東達二（1990）「三重サンベルトゾーン構想の推進と地域振興」『農業土木学会誌』6月号、pp. 603-608
- 福井英雄（1990）「磯部町のリゾート構想と町民意識」『京都地域研究』7月号、pp. 147-151
- 藤谷陽悦（1996）「大船田園都市株式会社の建築技師山田馨の経歴について」『日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）』1996年9月、pp. 59-60
- 別府市教育会編（1933）『別府市誌』別府市教育会
- 本間健彦（1989）『街を創る夢商人たち』三一書房
- 丸山雅子（1993）「日本近代におけるスパニッシュ建築の成立と展開に関する研究 その1」『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』1993年9月、pp. 1481-1482
- 丸山雅子（1994）「日本近代におけるスパニッシュ建築の成立と展開に関する研究 その2」『日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）』1994年9月、pp. 1425-1426
- 三沢浩（1998）『アントニン・レーモンドの建築』鹿島出版会
- 三宅拓也（2014）「美術工芸資料館収蔵品紹介30：松ノ井覚治の建築ドローイング」『KIT NEWS』京都工芸繊維大学、pp. 15-16
- 水沼淑子（2006）「アントニン・レーモンド設計の旧藤沢カントリー倶楽部クラブハウスについて」『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』2006年9月、pp. 533-534
- 水沼淑子（2009）『ジェイ・H・モーガン—アメリカと日本を生きた建築家』関東学院大学出版会

- 三宅拓也 (2014) 「松ノ井覚治のニューヨーク留学中の課題作品について」『日本建築学会大会学術講演梗概集 (近畿)』2014年9月、pp. 639-640
- 山鹿誠次 (1955) 『日本めぐり：絵とき百科4』偕成社
- 古茂田不二 (1992) 「日本食研が手がけた美しいパティオが魅力の小規模リゾートホテル—ケーオーホテル」『月刊ホテル旅館』1月号、pp. 191-200
- 吉田良治 (1992) 「海上保安最前線パート III-③：『日本のエーゲ海』ここにあり」『トランスポート』7月号、pp. 70-71
- Ewa Kawamura (2018) *L'italianizzazione del Giappone contemporaneo. Quartieri, centri commerciali e parchi a tema ispirati all'architettura e alle città italiane*, La Città Altra, Federico II University Press, Napoli, pp. 1075-1084
- Sabrina Dessi (2016). *Abitare in Sardegna: mode modelli e linguaggi*, Gamgemi, Roma.

### 〈新聞記事〉(時系列順)

- 「島根県経済連、ワイン新工場が完成し出雲路の観光名所にと期待。」『日本経済新聞』中国地方版、1986年3月20日、p. 11。
- 「住吉浜リゾートパーク、10年かけポルトガル風に、住吉浜開発。」『日本経済新聞』九州版、1987年8月9日、p. 13
- 「日本・サンランド、ホテルアクシオン館山—投資もレジャーも (先端リゾート情報)」『日経産業新聞』1988年1月16日、p. 3
- 「飛鳥建設グループ、リゾート事業を強化、館山に南欧風ホテル—伊東に仏風宿泊施設。」『日経流通新聞』1988年5月17日、p. 5
- 「外房は地中海風高級別荘地 房総リゾート開発構想発表 千葉」『朝日新聞』千葉朝刊、1988年8月4日
- 「房総リゾート半島胎動 ひしめく巨大開発 千葉」『朝日新聞』千葉県版朝刊、1989年1月1日
- 「横浜・新本牧—国際色豊かに街づくり、美観重視 (大規模開発を点検する)」『日経産業新聞』1989年5月19日、p. 23
- 「くれフェニックス計画、16の遊戯施設を設置—中四国最大規模に。」『日本経済新聞』中国地方版、1989年8月18日、p. 35
- 「伊王島リゾート、ホール新設宿泊も増強。」『日経産業新聞』1990年2月5日、p. 21
- 「スペイン風ホテル登場、会津高原たかつえ—日本サン・ランド。」『日本経済新聞』東北版、1990年3月14日、p. 24
- 「三重・磯部町にスペインの風景を再現 (列島縦横)」『朝日新聞』朝刊、1990年12月20日、p. 29
- 「我が家は南欧風個性派 (メトロポリス新景)」『日本経済新聞』、1991年1月26日、p. 5
- 「伊王島スポーツ、『ルネサンス長崎』にスペイン風コテージ。」『日経産業新聞』1991年2月25日、p. 18
- 「目指せ地中海リゾート、館山市の街並み景観要綱—白壁にオレンジ屋根指導。」『日本経済新聞』1991年3月1日、p. 5
- 「『岡山スペイン村』に県・玉野市が出資、事業会社、第三セクに。」『日本経済新聞』中国版、1991年7月25日、p. 35
- 「大分港西部に“ポルトガル村”再開発計画まとまる。」『日経流通新聞』1991年11月7日、p. 19
- 「玉野の『商業集積』始動、玉野街づくり株式会社、月内にも3セクに。」『日本経済新聞』中国地方版、1991年11月15日、p. 35
- 「地中海風で売ります 新島ショッピングモール 兵庫・津名町、」『朝日新聞』、兵庫県版朝刊、1992年1月24日
- 斎藤仁志「プライムリゾートクラブ賢島—近鉄のグループ力試す (追跡リゾート開発)」『日経産業新聞』1992年2月7日、p. 19
- 「アサヒ恒産と大成建設、南欧風リゾートホテル—沖縄・恩納村に建設へ。」『日経産業新聞』1992年9月8日、p. 20
- 「製菓の浜幸、高知・夜須町に建設—菓子工場併設滞在型リゾート、94年完成予定。」『日本経済新聞』四国版、1992年12月17日、p. 12
- 「高知の浜幸、来年開業、異色リゾート計画—地中海風、菓子工場も。」『日経流通新聞』1993年1月7日、p. 5
- 「長崎・伊王島、通年リゾート化へスポーツ施設整備。」『日本経済新聞』九州版、1993年1月20日、p. 14
- 「日本・ポルトガル修好450周年、国際交流の“先駆け”(列島ワイド)」『日本経済新聞』朝刊、1993年10月25日、p. 31
- 「岡山・玉野、スペイン村、事業着手、3度目の延期—資金難、規模縮小も。」『日経流通新聞』1994年3月15日、p. 17
- 「地中海風ホテルへ 元国民宿舎の鳴海荘改築、近く着工 勝浦／千葉」『朝日新聞』千葉朝刊、1993年7月27日
- 「鳴門のマジリリゾート、国際高級ホテル網に加盟—サービス強化、顧客増を図る。」『日本経済新聞』、四国版、1993年9月7日、p. 12
- 「初日の客は4万人！ 津名町の新商業ゾーン、15日オープン／兵庫、」『朝日新聞』、兵庫県版朝刊、1993年10月16日
- 「泉佐野フィッシュマンズ・ワールド、12月に3セク設立—ホテル建設など先送り。」『日本経済新聞』近畿版、1994年5月12日、p. 9
- 「島根ワイナリー—南欧風、出雲観光の定番に (発信この企業あの団体)」『日本経済新聞』広島地方版、1994年5月24日、p. 23
- 「ホテル小田急が静岡に進出 市内最大宴会場も／静岡」『朝日新聞』静岡県版朝刊、1994年10月18日
- 「泉佐野市の海洋レジャー施設、運営へ3セク設立。」『日経産業新聞』1994年11月11日、p. 19
- 「日本サン・ランド社長赤塩裕氏—ホテル会員に配当 (風雲トップ)」『日本経済新聞』朝刊、1995年5月3日、p. 13
- 「岩崎産業が計画、種子島に『ポルトガル村』—街並み再現、帆船も復元。」『日本経済新聞』九州版、1995年6月13日、p. 14
- 「[みなと] 鹿児島・種子島でテーマパーク「ポルトガル村」建設構想」『読売新聞』西部夕刊、1995年6月23日、p. 11
- 「長崎市、十八銀など、長崎『食文化拠点』建設へ3セク設立。」『日本経済新聞』1996年4月4日、九州版、p. 13
- 「町並みに南欧の風 駅や銀行、駐在所…磯部町に建築物続々／三重」『朝日新聞』三重版朝刊、1997年6月13日
- 「JR東日本千葉支社、館山駅を橋上化、南欧風の外観に。」『日本経済新聞』千葉版、1997年12月3日、p. 39
- 「ゴミ焼却熱利用し温水プール 深谷に「パティオ」オープン／埼玉」『朝日新聞』埼玉朝刊、1996年7月4日
- 「客室123室備える、ホテルモントレ長崎きょう開業。」『日本経済新聞』九州版、1997年4月18日、p. 13
- 「再生を目指して三井三池閉山から1年(上)“核”探し—商業施設地元とどう共存。」『日本経済新聞』九州版、1998年3月25日、p. 14
- 「施設相次ぎ開幕式典 明石海峡大橋、きょう開通／兵庫」『朝日新聞』兵庫県版朝刊、1998年4月5日
- 「観光の街『セキアヒルズ』が県境に完成 熊本・福岡【西部】」『朝日新聞』朝刊、1998年4月18日、p. 1.



- 「九州の行楽施設、GW 期間中の人出、近場志向映し多めの予想。」『日本経済新聞』九州地方版、1998年4月25日、p. 14
- 「『星の王子さま』箱根に降り立つ、サハルと小田急電鉄が展示施設。」『日経流通新聞』1998年9月29日、p. 19
- 「岡山・玉野で環境庁、放置ホテル購入、環境研修施設に。」『日本経済新聞』広島版、1998年10月31日、p. 23
- 「海望む丘、南欧風のしゃれた校舎 淡路景観園芸学校が完成／兵庫」、『朝日新聞』、兵庫県版朝刊、1999年2月11日
- 「三井不動産、神戸のアウトレットモールの名称決定。」『日経流通新聞』1999年5月13日、p. 8
- 「南欧の田舎イメージ、商業施設の出足好調一都城、商店街有志が運営。」『日経流通新聞』1999年6月24日、p. 23
- 「ホテル『ルネサンス長崎・伊王島』ラテン色さらに強く一10月改称、人材スカウト。」『日本経済新聞』九州版、2000年8月26日、p. 14
- 「箕面マーケットパークヴィソラ（大阪・箕面市）南欧の街並みイメージ（みせどころ）」『日経 MJ（流通新聞）』2003年11月1日、p. 10
- 「大洗にアウトレットモール 来春開業、衣料や雑貨など70店舗＝茨城」『読売新聞』2005年6月24日
- 「千葉県内観光地の3駅改装、来月末、まず安房鴨川駅。」『日本経済新聞』千葉版、2006年2月1日、p. 39
- 「ラ・フェット多摩南大沢（八王子市）—南欧風の街で買い物（多摩逍遙そぞろ歩き）」『日本経済新聞』2007年8月24日、p. 15
- 「きょう拡張オープン、計112店舗に 八王子・南大沢のアウトレットモール」、『朝日新聞』多摩地方版朝刊、2007年12月14日、p. 35
- 堀川勝元「(週刊まちぶら あなたの街から) 大津市・青山地区 住民が醸す協力の輪／滋賀県」『朝日新聞』滋賀県版朝刊、2009年9月6日、p. 27
- 「PAに新風『星の王子さま』県内高速道の休憩施設、『変身』相次ぐ」『朝日新聞』、埼玉県版朝刊、2010年7月3日、p. 28
- 「江戸や欧州風…テーマパーク型PA 続々ドライブ休憩、心の交差点（お出かけナビ）」『日本経済新聞』夕刊、2014年3月8日、p. 4
- 中川竹美「国内で浸る 地中海の情緒 イタリア・スペイン…一歩入れば異国の街並み 本場の家具使う滞在型リゾート」『日本経済新聞』夕刊、2015年5月16日、p. 4
- 「和歌山の『ポルトヨーロッパ』、3月から入園無料に、『黒潮市場』は一部改装、回遊性高め集客狙う。」『日本経済新聞』近畿地方版、2016年1月29日、p. 9
- 「『志摩地中海村』が拡張、婚礼・宿泊新增設、サミット後にらむ。」『日経 MJ（流通新聞）』2016年2月3日、p. 4
- 堤恭太「ここは『千葉フォルニア』ヤシ・青い海…気分はカリフォルニア 袖ヶ浦／千葉県」『朝日新聞』ちば首都圏版朝刊、2017年9月18日、p. 25

#### 〈参考サイト〉

- アクア・パラダイス・パティオ「施設案内：深谷グリーンパークとは」<https://patio.or.jp/about.html>（2022年10月19日閲覧）
- 一般財団法人自治体国際化協会「姉妹提携データ：スペイン」<http://www.clair.or.jp/j/exchange/shimai/countries/detail/53>（2022年10月18日）
- UBE 宇部市 未来を彫刻するまち「交流の経緯と姉妹都市提携調印式（スペイン カステジョ・デ・ラ・プラーナ市）」<https://www.city.ube.yamaguchi.jp/shisei/keikaku/kokusai/1007220/1007233/1007235.html>（2023年2月9日閲覧）
- CLAIR Paris（クレア・パリ）「日仏間の姉妹都市一覧表」<https://www.clairparis.org/ja/action-jp/cd2-jp>（2022年10月18日閲覧）
- 在イタリア日本国大使館「日本・イタリア間で提携された姉妹都市」[https://www.it.emb-japan.go.jp/itpr\\_ja/b\\_000087.html](https://www.it.emb-japan.go.jp/itpr_ja/b_000087.html)（2022年10月17日閲覧）
- 在ポルトガル日本大使館「日本・ポルトガル間姉妹都市」[https://www.pt.emb-japan.go.jp/itpr\\_ja/00\\_000161.html](https://www.pt.emb-japan.go.jp/itpr_ja/00_000161.html)（2022年10月18日閲覧）
- 志摩地中海村「お食事のご案内」<https://www.puebloamigo.jp/meal/>（2022年11月6日閲覧）
- 志摩地中海村「施設案内」<https://www.puebloamigo.jp/facilities/>（2022年10月28日閲覧）
- 渋谷区「通りの名」<https://www.city.shibuya.tokyo.jp/bunka/spot/meisho/street.html>（2022年11月4日閲覧）
- 清水建設「京都ホテル」[https://www.shimz.co.jp/works/jp\\_com\\_192802\\_kyotohotel.html](https://www.shimz.co.jp/works/jp_com_192802_kyotohotel.html)（2022年10月26日閲覧）
- 東急リパブル「逗子マリーナ」<https://www.livable.co.jp/mansion/library/M000000116963/>（2022年11月6日閲覧）
- ながさき市民生活便利館メルカつきまち「メルカつきまちな概念」<http://www.merca-tsukimachi.jp/concept.html>（2022年11月7日閲覧）
- 廃墟探索地図「シャトー三宝」<https://haikyo.info/s/9427.html>（2022年11月7日閲覧）
- 箱根マイセンアンティーク美術館「建物について」<http://www.hakone-meissen.com/museum.html>（2022年10月26日閲覧）
- 東アジア人文情報学研究センター「建物の歴史」<http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/introduction/building/>（2022年11月3日閲覧）
- 藤森照信「日本近代建築におけるアメリカの影響に関する研究」1998-99年度科研費基盤研究（C）、<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-10650628/>（2022年10月24日閲覧）
- 富士屋ホテルズ&リゾーツ「ホテルヒストリー」<https://www.fujiyahotel.co.jp/history/>（2022年10月26日閲覧）
- ポルト・ヨーロッパ「パークガイド」<https://www.marinacity.com/porto/guidecat/photospot/>（2022年11月6日閲覧）
- 名曲喫茶ライオン「名曲喫茶ライオンの歴史」<http://lion.main.jp/info/infomation.htm>（2022年10月26日閲覧）
- 山口宇部経済新聞「宇部の結婚式場『風のみえる丘フェリース』が10周年—記念イベントも」2013年1月30日配信、<https://yamaguchi.keizai.biz/headline/1643/>（2022年11月3日閲覧）